

発掘調査報告第24集

駒ヶ根市東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業

(昭和62年度分) 埋蔵文化財緊急発掘調査

古 城 南 遺 跡

1988・3

上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第24集

駒ヶ根市東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業

(昭和62年度分) 埋蔵文化財緊急発掘調査

古 城 南 遺 跡

1988・3

上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会



出土陶磁器

序 文

今回ここに、刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根東部土地改良区下間地区的
県営ほ場整備事業に伴い、昭和62年度に実施しました古城南遺跡の緊急発掘調査報告
書であります。

古城南遺跡の付近には、古城・昔沼城などの中世の遺構が知られており、今回の調
査によってこれらと関連する遺構・遺物が発見されており注目されるところであります。

発見された遺構は、奈良時代の後半の住居跡を初め中・近世の建物址など、今後の
研究上に果たす役割は大きなものがあると確信いたしております。

長期にわたる発掘調査にあたられた林茂樹団長を始めとする調査団の皆さん、快く
発掘作業に参加してくださった地元の方々、事業に対し深いご理解をいただいた東部
土地改良区並びに上伊那地方事務所関係者の方々、地主の皆さま方等、多くの皆さま
のご協力・ご厚志によって無事初期の目的を果たすことができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともにこの報告書が地域史研
究の一助にならんことを念願する次第であります。

昭和63年3月15日

駒ヶ根市教育長 木下 衛

例　　言

- 1 この報告書は、昭和62年度駒ヶ根市下間地区県営は揚整備事業に伴うもので、文化庁補助事業と上伊那地方事務所の委託を受けて実施したものである。
- 2 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の詳細な検討は後日の機会に委ねることとした。
- 3 遺構の製図は気賀沢進があたった。焼土はドットで表し、縮尺は各図に示してある。
- 4 土器の実測は気賀沢が石器の実測は大宮愛子が、製図は大宮があたった。
- 5 本報告の執筆は 第II章、III章、IV章第2節1・2を気賀沢が、他は団長林茂樹があたった。
- 6 写真撮影は遺構関係は気賀沢、遺物関係は木下平八郎がこれにあたった。
- 7 陶磁器については愛知県瀬戸市立歴史民俗資料館藤沢良祐氏にご指導を賜った。ここに誌して謝意したい。
- 8 遺物及び実測図並びに調査に伴う関係資料は駒ヶ根市立博物館に保管してある。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿 図 目 次

図 版 目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 位置及び地形・地質..... 1

第2節 歴史的環境..... 1

第Ⅱ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過..... 7

第2節 発掘調査経過..... 8

第Ⅲ章 発掘調査概要..... 12

第Ⅳ章 遺構及び遺物

第1節 中世及び近世の遺構・遺物..... 12

第2節 古代の遺構・遺物..... 39

第3節 原始時代の遺構・遺物..... 46

第Ⅴ章 総括

第1節 まとめ..... 51

第2節 所見..... 51

挿図目次

第1図 古城南遺跡位置図	2
第2図 古城南遺跡地形断面図	3
第3図 中沢台地及び周辺遺跡分布図	4
第4図 下間地区ほ場整備事業計画図	6
第5図 古城南遺跡グリッド図	10
第6図 古城南遺跡遺構全測図	11
第7図 第1号掘立柱式建物址実測図	12
第8図 第2号・3号掘立柱式建物址実測図	13
第9図 第4号・5号・6号掘立柱式建物址実測図	15
第10図 第7号・8号掘立柱式建物址実測図	16
第11図 第9号掘立柱式建物址・第9号柱列址実測図	17
第12図 第1号・2号・3号柱列址実測図	18
第13図 第4号柱列址実測図	19
第14図 第5号・6号・7号・8号柱列址実測図	20
第15図 中世土壙実測図	23
第16図 第1号溝址実測図	26
第17図 第2号溝址実測図	27
第18図 第3号溝址実測図	28
第19図 第4号・5号溝址実測図	28
第20図 出土陶器実測図	30
第21図 出土砥石実測図	33
第22図 出土古錢、墓石	34
第23図 第1号堅穴式住居址実測図	39
第24図 第1号堅穴式住居址カマド実測図	40
第25図 第1号堅穴式住居址出土遺物	41
第26図 第2号堅穴式住居址実測図	42
第27図 第2号堅穴式住居址カマド実測図	42
第28図 第2号堅穴式住居址出土遺物	43
第29図 編物用錐石実測図	44
第30図 挿文時代土壙実測図	46
第31図 出土土器拓影図	47
第32図 出土石器実測図	48
第33図 出土土礫・土製耳栓実測図	49

第34図 信州伴野市場図	54
出土陶器要目一覧表	35
編物用石鍤要目一覧	45

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡遠景
- 図版 2 A区遺構遠景
- 図版 3 A・B区遺構遠景と掘立柱式建物址
- 図版 4 第1号竪穴式住居址
- 図版 5 第2号竪穴式住居址
- 図版 6 土墻
- 図版 7 出土遺物
- 図版 8 編物用鍤石

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 位置及び地形・地質

1. 位置 (第1・2・3図 図版1)

古城南遺跡は、長野県駒ヶ根市中沢菅沼区小字西原2901番地から2960番地に至る範囲内に所在する。駒ヶ根市元標から東方へ直線距離で4,000m、天竜川左岸の中沢段丘西端にあり、低位段丘上に位置する。この段丘が西原段丘とよばれ、古くから桑園として利用され、今世紀後半期水田が造成され、農耕用地として利用されている段丘面で、遺跡はその南端舌状部に位置することになる。標高は616mを示している。

2. 地形及び地質 (第1・2・3図 図版1)

中沢段丘は、大地溝帯の内帶側に形成された伊那山地の西側において、伊那盆地本谷側に向かって形成された扇状地形を、伊那山地から西流する新宮川・下間川の二川によって北側及び南側を深く開析され、さらに洪積世の後末期に御岳火山の噴出による降灰が8m余堆積し地表はテフラ層が全面を覆った。さらに洪積世前期からの天竜川・大田切川の流量の消長により、5段の河岸段丘を形成し、東西2,500m、南北600mの台地状段丘地形が形成されたのである。

当地域の地質的基盤は、領家変成岩と領家花崗岩の接触地帯で複雑な様相を呈する。この上部は厚い段丘礫層で、片麻岩、花崗岩、砂岩、変成輝緑岩、頁岩、泥岩等で構成される。

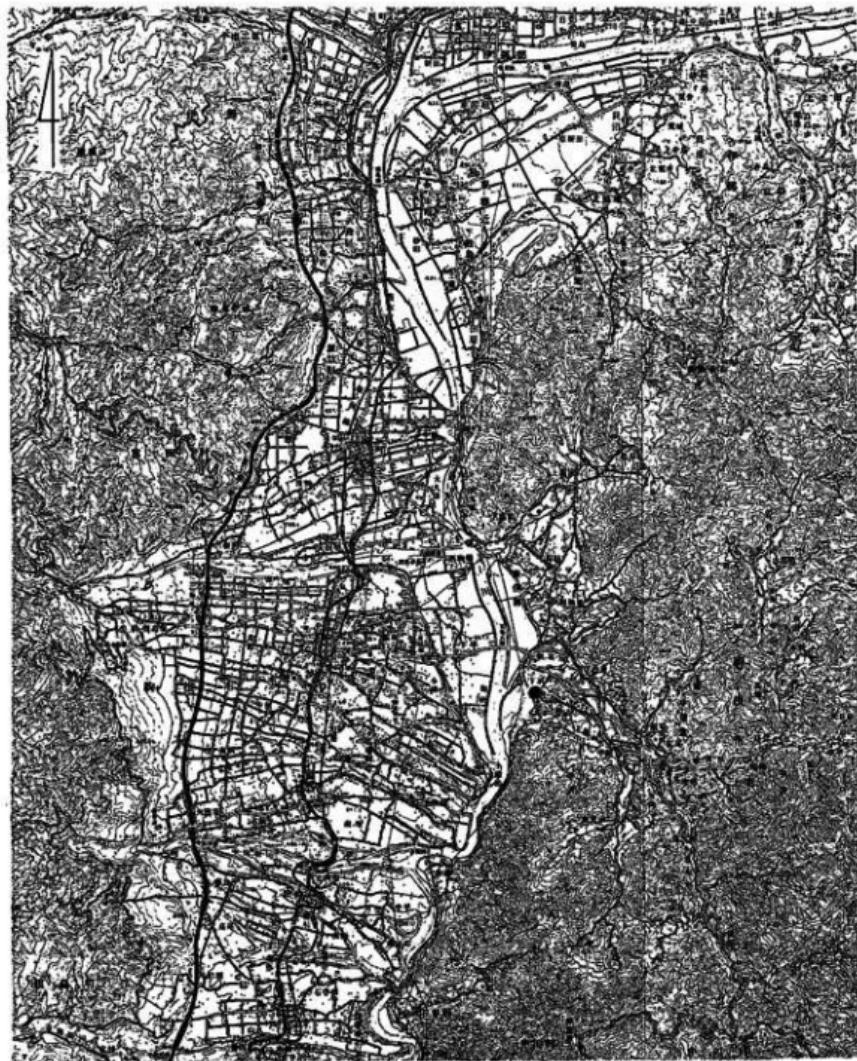
本地点は、天竜川床から数えて、2段目の低位段丘であるが、比高約50mで高く川床に臨接する台地状地形で、段丘崖は急峻である。西原段丘面上は、テフラ層が2mほど堆積しており、新期ローム層上半部と考えられる。東西200m、天竜川に沿って南北450mの平地状段丘面を形成し、本遺跡はこの南端部に位置する。ここでは段丘幅はやや狭くなり舌状地形を形成し比高45mをもって、段丘崖下を南流する新宮川の河口に臨む台地突端を占めている。

なお、前述の5段の段丘面は、川床から1—ナギハバ面(560m)、2—西原面(616m)、3—菅沼面(630m)、4—東原面(645m)、5—高見原面(660m)と仮称する。

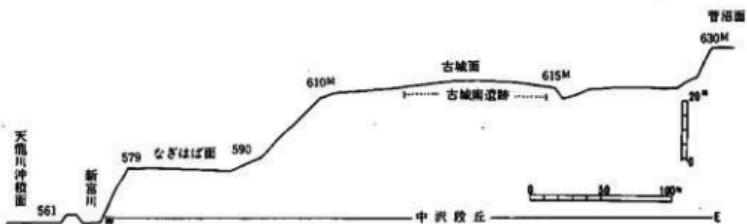
第2節 歴史的環境 (第2図)

1. 周辺の遺跡分布

古城南遺跡のある西原周辺には、当遺跡西北方300mの段丘端に古城跡(22)があり、室町時代の城郭跡を残している。本遺跡名の根据となった。



第1図 古城南遺跡位置図 ($S = 1 : 100,000$)



第2図 古城南遺跡地形断面図（横断線方向は第4図35区標示北端線の延長）

また、東南方200mの菅沼段丘の下間川に臨む突端に菅沼城跡があり、連郭式の城郭の姿をよく保存しており、中世の城郭として注目すべきである。城跡周辺に館跡、町屋地割を伴っている。この城主 菅沼頼貞は大永4年(1524)、諏訪神社上社御頭祭の御頭をつとめ16世紀末における中沢郷を代表して大祭を執行しており、その権力および財力の豊かさを想わせるものがある。

縄文時代遺跡としては、当遺跡の北東200mの西原2,900番地台一帯に、縄文土器・石器等を、濃密に出土する。近くに湧水があり、縄文時代中期の集落の存在を予察し得た。「西原遺跡」である。

また当遺跡の東南、用水路をへだてた100m地点、フルト地籍から縄文中期初頭期や弥生式の土器が多量に散布し、中世陶器片や宋銭が出土し、良好な遺跡であることを示している。

以上のように、本遺跡周縁は、中世の遺跡が濃密であり注目したい。

2. 中沢台地上の遺跡分布

古城南遺跡がある中沢台地一帯および南側の下間川左岸、新宮川右岸には縄文時代から中世に至る遺跡が50箇所近く存在するので時代の推移に伴ってその概略を紹介したい。

旧石器時代は今のところ発見されていないが、洪積世の段丘地形と地層で構成されている台地の各所に自然湧水地点があるのでその付近で、近い将来発見される可能性が高い。

縄文時代の遺跡は、天竜川沿岸の下位段丘から高位に向かって述べるとまず第2段丘に古城南遺跡(21・中期)があり、続いて新宮川沿岸に柴遺跡(32・後期)、第3段丘には高見原遺跡に西接する東原(5・中期)、久保垣外(6・中期)、日向(4・中期)、下間(24・中期)、持木平遺跡(35・中期)が高見原遺跡の衛生的地位を保つように所在している。高位の第四段丘面では高見原の東方500mに的場遺跡(11・早期・中期)、門前・荒井遺跡(12・中期・後期)、上垣外遺跡(9・中期)が高見原丘陵の基部的位置に群集している。

本台地の南側対岸の下間川流域には、下流から梨の木平(17・中期)、細久保(16・中期)、小山Ⅲ(31・後期)が狭い山麓線に並列している。



1. 古城南 2. 横山A 3. 横山B 4. 日向 5. 東原 6. 久保垣外 7. 町
 8. 高見坪ノ内 9. 上垣外 10. 門前 11. 的場 12. 高見城址 13. 小山 14. 羽前場
 15. ごみ垣外 16. 細久保 17. 梨ノ木平 18. 菅沼 19. 菅沼城址 20. 常秀院 21. 高見原
 22. 古城址 23. 五郎垣外 24. 太座垣外 25. 小林 26. 德光地 27. 下間 28. 香花社
 29. 白山城 30. 一本柿 31. 小山 32. 柴 33. 原城址 34. 曾倉館址 35. 持木平
 36. 狐くぼ 37. 順村 38. 菅沼の宝鏡印塔

第3図 中沢台地及び周辺遺跡分布図 (S = 1 : 20,000)

本台地の北側、新宮川をへだてた対岸の本曾倉地区には、下流から山麓の小規模な台地上に五郎垣外（23・中期）、太座垣外（24・早期）、河岸に近い低位段丘上に小林遺跡（25・中期・後期）が所在している。

以上のように中沢台地面は縄文時代人の生活痕跡がいたる所に遺存している。

弥生時代の遺跡は、前代に比べ急激に衰退し、わずかに菅沼の上の原（後期）中割の久保垣外（6・後期）、下間川の南岸の羽前場（14・後期）に遺物が散見する程度である。稻作農耕を中心とした弥生人の生活条件には適さないことは、中沢台地面は高燥で水が少なく、段丘地形のため傾斜面が多いことなどを原因としてよいであろう。

古墳時代も、農耕生活が中心であったため弥生時代と同じく発展していない。東原（5）の旧中沢小学校敷地に明治年代には数基の小さな墳丘があったことを伝承しているのみであり、遺物としては、古式須恵器が菅沼細久保から出土している。

奈良・平安時代の遺跡は、高見原丘陵の周辺に急に増加してくる。中沢台地の内央部の西部から東原遺跡（5・平安）、久保垣外遺跡（6・平安）、徳光地（26・平安）と東方に連なり新宮川の低位面にある坪の内遺跡（26・平安）に続き、更に台地上の的場（11・平安）、門前（10・平安）、一本柿（30・平安）と続き、さらに台地の南対岸の山麓にごみがいと遺跡（15・小山第II・平安）その下間川下流に梨の木平（17・平安）等それぞれ灰釉陶器・須恵器・土師器を伴出する遺跡10遺跡が台地の周縁に沿って展開している。奈良時代の遺物は今のところ見当たらない。

鎌倉・室町時代になると、中沢台地の中心部に数多くの遺跡が集中する。まず台地の基部、的場（11）、一本柿（30）、白山城（29）、坪の内（8）、香花社（28）、高見城址（12）、町（7）、日向（4）、高見原（21）、横山（2）とほぼ台地の中軸線にそっておよそ1kmほどの長さに展開している。

また台地の南対岸に小山I遺跡（13）がある。これは昭和59年10月、発掘調査により発見された室町時代中期に造営された単郭方形居館址であった。また高見原遺跡第VII地点から、昭和61年夏、中世館址とおぼしき建物3棟、近世初頭の建物3棟等が発掘調査の結果検出された。

また、中沢台地の基部の北側、新宮川沿岸の低位段丘面上に坪の内遺跡（8）が、昭和60年10月発見された。地表下2mの層位に掘立柱式建物があり、12世紀末の館跡と考えられる。

この時代の地上の遺構として現存するものも、この台地上に数が多い。まず坪の内遺跡の西方100mにある香花社（28）は新宮川谷に突出する円形の残丘上にあるが、この円丘をめぐる周縁跡が、昭和60年10月、土地改良事業により発見され、古瀬戸灰釉陶器が出土していて、古式城郭と認められた。また坪の内遺跡の南方の50mの高位段丘上に白山城址（29）があり、単郭長方形の郭が遺存し古瀬戸灰釉陶片等が出土している。その西南方に高見城址（12）があり西城郭、外城郭を遺存し、西部の陵線上に「ますがた」と直線道路と町屋割を残す町遺跡（7）が現存している。

また台地の北岸対岸の本曾倉区には曾倉居館址（34）が現存し、その西北1km地点、第2段丘上の突角に原城址（32）が郭跡を遺存している。また高見城址の東方1kmの山麓に佐越城址が位置する。

以上の城郭跡は、戦国時代の甲斐武田氏統治以前の構築と目され、この中で古形式をとどめるものは古城址・香花社城址と考えられ、他は14世紀から16世紀前半期のものと考えられる。

また普沼大乗寺跡に、「明徳三年」の宝寶印塔(38)が現存する。

以上のように中沢台地上には、縄文時代遺跡について中世の遺跡が多い点を注目したい。



第4図 下間地区は場整備事業計画図 ($S = 1 : 2,000$)

(点線内が発掘計画範囲)

第Ⅱ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

県営は揚整備事業駒ヶ根市下間地区の昭和62年度施工区域内に古城南遺跡が含まれることとなり、昭和61年9月11日に県教委・上伊那地方事務所・地元関係者・市教育委員会並びに学識者林茂樹氏出席のもと事前保護協議を行い検討の結果、やむを得ず「記録保存措置」を実施することとなり、その調査費用220万円（国庫補助事業分605,000円、農政部局側1,595,000）、調査面積328m²以上の事業計画を策定した。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、古城南遺跡発掘調査団を組織し、団長には、林茂樹をお願いして、昭和62年6月25日より現場作業を開始した。

事務手続きは、以下のとおりである。

昭和62年4月27日 文化財関係国庫補助事業内定通知（4月3日内定）、5月6日申請、7月20日交付決定通知

5月15日 埋蔵文化財発掘調査の通知

6月16日 上伊那地方事務所長と駒ヶ根市長との委託契約

6月22日 市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との再委託契約

6月25日 現地作業開始

6月30日 県費補助事業内示 7月3日申請 8月5日交付決定通知

○駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧問 小平 善信（駒ヶ根市文化財保存会会長）

鈴木 義昭（駒ヶ根市教育委員長）（昭和62年9月30日まで）

中山 敬及（駒ヶ根市教育委員長）（昭和62年10月1日より）

会長 木下 衛（駒ヶ根市教育長）

理事 中村 平一（駒ヶ根市教育次長）

友野 良一（駒ヶ根市文化財審議会会長）

松村 義也（駒ヶ根市文化財審議会副会長）

竹村 進（駒ヶ根市文化財審議会委員）

中山 敬及（駒ヶ根市文化財審議会委員）（昭和62年9月30日まで）

林 起（駒ヶ根市文化財審議会委員）

福沢 正陽（駒ヶ根市立博物館長）

監事 宮下 恒男（駒ヶ根市収入役）

北沢 晋六（駒ヶ根市郷土研究会会長）
幹事 堀 勝福（駒ヶ根市教育委員会社会教育係長）
滝沢 修身（駒ヶ根市教育委員会社会教育係）
気賀沢 進（駒ヶ根市立博物館）
白沢 由美（駒ヶ根市立博物館嘱託）

○古城南遺跡発掘調査団

団長 林 茂樹（日本考古学協会員）（発掘担当者）
調査主任 気賀沢 進（日本考古学協会員）（発掘担当者）
調査員 木下平八郎（長野県考古学会会員）
小町谷 元（上伊那考古学会会員）
小松原義人（長野県考古学会会員）
和田 武夫（長野県考古学会会員）

50音順

駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査事務所 駒ヶ根市上穂栄町23番1号
駒ヶ根市立博物館内

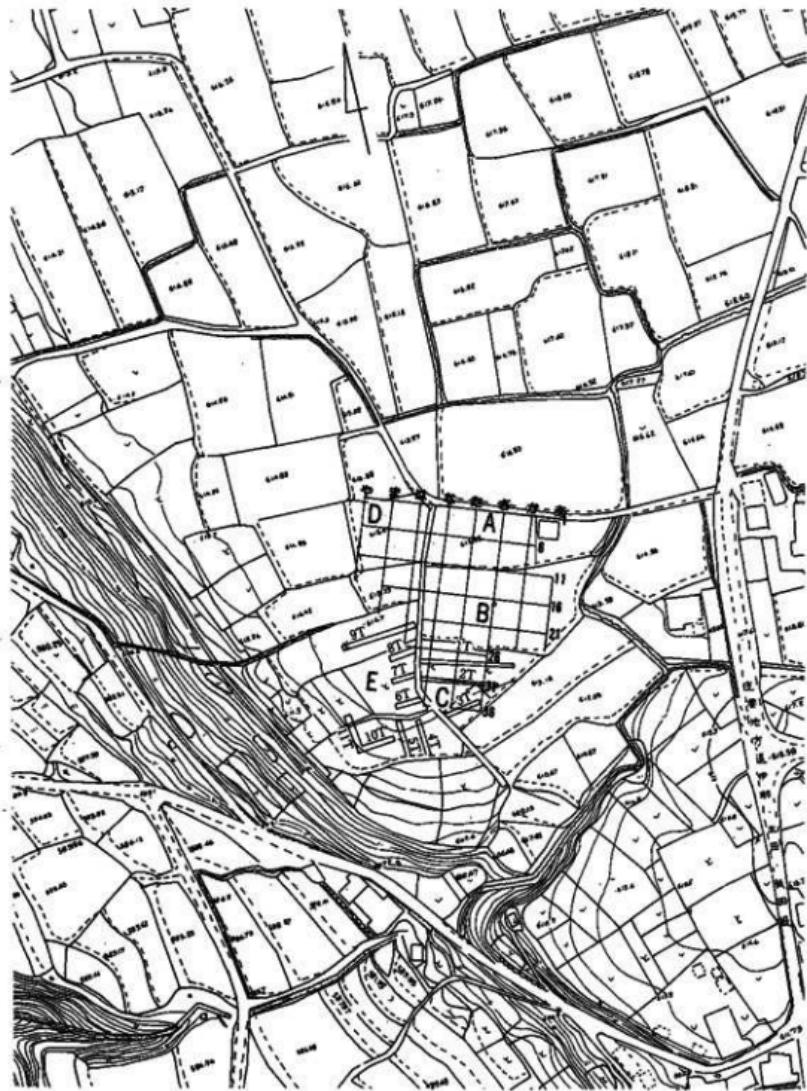
第2節 発掘調査経過

- 6月22日（月） 器材点検準備
6月23日（火） 器材運搬
6月25日（木） 本日より現操作業開始。発掘開始式の後テント設営、草刈、グリッド設定。午後よりグリッド掘り。18-く・し・た・つ・と、20-す・ち、22-く・し・た・との掘り下げ。陶器片出土。
- 6月26日（金） 昨日に続き各グリッド掘り。新たに3-く・さ・せ・て、5-か、6-く・さ・せ、8-し・た・なを掘り下げる。柱穴や溝状造構検出。
- 6月27日（土） グリッド試掘。6-は・ほ・む・や、9-は・へ・み・も、13-は・へ、14-み、16-は、ほ掘り下げ陶器片出土。南側桑畠部分に11のトレンチ溝設定昨日確認された6-く落ち込み拡張。
- 6月30日（火） 1~11トレンチ試掘。1トレンチ東側より土師器出土して落ち込み確認。3トレンチ西側道ぎわにやはり黒い落ち込みある。
- 7月1日（水） 各トレンチ清掃。1~9-かへす全面にわたって表土はぎを行う。溝状造構が東西に走っていることを確認。

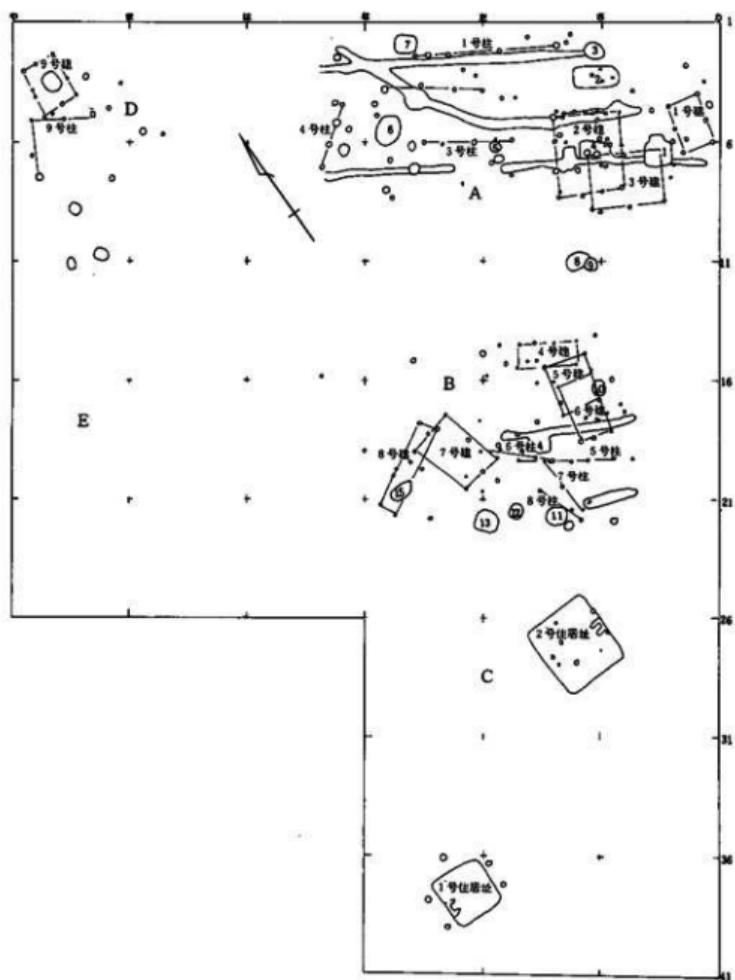
- 7月2日（木） 試掘の結果、中世の生活面が広範囲に及ぶことがわかったため、重機によって表土はぎを行うこととする。2～9-たへや重機による表土はぎ、つづいてⅡ層地場の精査。
- 7月3日（金） 雨のため現操作業中止、午後団長と溝址の検討を館にて行う。
- 7月4日（土） 7～9-す～なの中世面までの精査。11～21-け～ぬ重機による表土はぎ、A区中世面の清掃後、柱穴・竪穴址・溝状遺構精査。
- 7月6日（月） A区の精査。溝状遺構は3本、土壤と思われる整穴址7基、柱穴群多数検出。
- 7月7日（火） 重機による表土はぎの後のB区の地場削り中世面の検出。
- 7月8日（水） A区の整穴址・柱穴址の精査。
- 7月9日（木） B区の竪穴址・柱穴址精査。竪穴址は8～15号までである。
- 7月10日（金） 昨日に続き8～15号整穴及び柱穴址精査。C区遺構検出に努める。25-さと36-たの西側に住居らしき落ち込み確認。いずれもトレント調査の折のものである。一部精査行う。柱穴址などはない。古城遺跡試掘のため作業1時中断。
- 7月17日（金） 1～10-は～まD区遺構確認を行う。雨のため3時30分にて作業中止。
- 7月21日（火） 1～10-ま～やD区遺構確認を行う。1号・2号住居址精査。
- 7月22日（水） 1～10-ま～やD区遺構確認を行う。1号・2号住居址精査。
- 7月23日（木） D区柱穴址及び1号・2号住居址精査、テント撤収・器材片付けをして現操作業は一応終了する。
- 7月24日（金） 住居址測量、カマド精査。
- 7月25日（土） 午前中土地改関係者・中沢小学校児童。午後一般者計190名を対象に見学会を行う。
- 7月28日（火） 柱穴群等測量。

発掘調査参加協力者（順不同）

林吉十 春日きくえ 久保田節子 宮沢かつゑ 林みさ子 宮下好明 竹村章子 宮下錦 吉沢政雄 林利子 北原すみゑ 木下美代子 竹村初子 竹村幹雄 木下久子 中島文吉 宮沢国男 五十川長 倉田義男 北原和枝 小町屋春子 白鳥美枝子 滝沢みのる 大宮愛子



第5図 古城南遺跡グリッド図 ($S = 1 : 2,000$)



第6図 古城南遺跡遺構全測図 ($S = 1 : 500$)

第Ⅲ章 発掘調査概要 (第5・6図)

下間川に面する南西斜面に古城南遺跡は位置している。調査方法はグリッドと一部トレンチ方式を用い試掘の結果を待って全面発掘に切り換えることとした。今調査では遺物散布が広範囲にわたったため、止むを得ず重機を用いて表土をはねることとした。

グリッドの基点を計画区の東北とし、旧道に沿ってほぼ西方向に50音順、南方向に算用数字を用い 2×2 mのグリッドを設定した。旧地形にあわせてA～Eの5地区に分けて呼ぶ。

遺跡の南西部(C・E区)は桑畠となっており、うねに沿ったトレンチを12本任意に設定し、試掘を行った。その結果1号と3号トレンチに遺構が確認されたため、グリッドに組み入れて調査を行った。

層位は表土(I層)、地場及び埋土(II層)、黒色土(III層)、漸移層(VI層)、ローム層(V層)である。

調査の結果については、中世・近世の建物址9棟、柱列址9基、土壙16基、竪穴住居址2基である。第IV章において詳述する。

第IV章 遺構及び遺物

第1節 中世及び近世の遺構・遺物

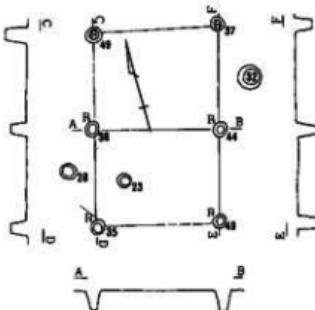
1. 掘立柱式建物址

発掘調査をしたA区の全面約600m²、B区の東半部約400m²、D区の中央部200m²に、掘立柱痕が、それぞれ密集あるいは、散在した状態で検出された。

これを検討・整理した結果、A区においては、掘立柱式建物3軒、B区においては5軒、D区において1軒の計9軒の所在状況を明らかにした。以下軒別に詳述する。

1) 掘立柱式建物第1号址(第7図 図版2・3)

本址はグリッド4・5・6-か・き・くの位置から検出された。規模は2間×1間で、桁行420cm、梁行250cmを測り、柱間(以下真々法で示す)。桁方向210-210cm、梁間250cmを測り、主軸方向はN-15°-



第7図 第1号掘立柱式建物址実測図
(S = 1 : 120)

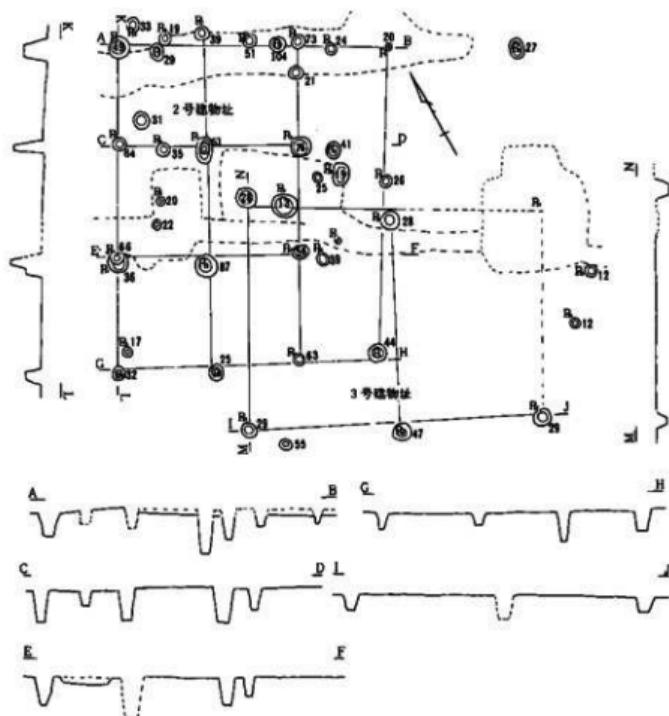
Eを示す。6柱穴で構成する長方形プランの掘立柱式建物である。床面は何の痕跡も構造も認められなかった。

各柱穴の掘り方は径30cm内外の円形を呈し、深さはP4、P1で49cm、P5で35cmを測り平均40cm内外を示している（第IV層下面からの計測である。）

遺物は、直接共伴するものはなかったが、P2北東1mから瀬戸鉄軸天目茶碗片（No.76）、P4南側に古志野陶碗（No.6）が出土し、他の遺物は出土していないことから、ほぼ17世紀前半期の建物と推定される。他の建物址と比べ最も構造的な側柱式建物である。

2) 掘立柱式建物第2号址（第8図 図版2）

本址は、グリッド5・6・7-け・こ・さ・しの位置から検出された。3間×3間の掘立式柱穴18個で構成され、主軸方向N-30°-Eを示す3間（6.8m）×3間（5.6m）の長方形プランの建物である。南東隅で第3号址と切り合い、およそ9m²を重複させている。床面は特に何もない。



第8図 第2号・3号掘立柱式建物址実測図（S=1:120）

柱間は、桁行の西側で220cmの3間、東側で280-360の2間、梁行は380cm-200cm（北側）・南側で200-200-180の3間を測る。柱穴はP 49で径40cmで各柱とも多少の差があるもほぼ同じである。ただしP 17・P 18・P 23はやや大きく50cm内外で深さも他の深さが30cm~40cmを示すのに対して、深さ76cm、56cmと特に深く、南側入口を除き総柱的な建物と推定される。敷地内出土の陶器は、内耳土器片（No.22）、瀬戸天目茶碗片（No.65）が検出されており、柱間が180cm、200cmが基準になっていることからほぼ16世紀も前半期の建物と推定される。

3) 捩立柱式建物第3号址（第8図 図版3）

A区 グリッド5・6・7-こ・さ・しの位置に検出された柱穴群P 28-P 34により構成される1間×2間の長方形プランの摺立柱式建物で、桁行6m、梁行4.4mを測り、主軸はN-60°-Wを示す。四周の側柱のみで構成され、南北側柱間300cm-300cm、東西側は440cmを測る、側柱式建物である。柱穴はP 28で40cm深さ30cm、P 48で深さ40cmを測る。但し、北東隅柱P 31は土壠第1号址に攪乱され、不詳である。床面には普通状態であった。第2号址と西北隅を重複している。遺物は、内耳土器片（No.24）を出土した。これらのことから16世紀後半期の建物と推定される。

4) 换立柱式建物第4号址（第9図 図版3）

B区の北部分、グリッド14-し・す・せの位置に検出されたP 1-P 6の長方形に配置された柱穴群で構成される3間×1間の摺立柱式建物である。桁行5.0m、梁行2.0mを測り柱間は、北側で140cm-160cm-180cm、南側で240cm-260cmを測る。主軸はN-60°-Wを示す。柱穴は一般に細く25cm内外、深さ19cm未満である。内部西隅に柱穴P 12、P 41が近接しているが特に関係しない。床面は何の徵候もない。遺物は屋外の北東4mの同層位から古瀬戸天目茶碗（No.43）破片を出土しており、柱間200cmを測る特徴から、16世紀前半の時期と推定される。いわゆる側柱式長屋風の粗雑な建物で四壁の構造は当初からなかったように思われる。

5) 换立柱式建物第5号址（第9図 図版3）

B区の北部分、グリッド14・15・16-さ・しに位置する柱穴群P 7-P 12によって構成される長方形プランを持ち、2間×1間の摺立柱式建物で主軸はN-13°-Eを示す。桁行4.2m、梁行3.2mを測る側柱式建物である。柱穴は径35cm内外、深さ30cm内外。柱間は妻柱間360cm、側柱間200cmを測る。

床面には何の徵候も残されていない。敷地南半部を第6号址と内接重複し、北側も第4号址とわずか内接する。

遺物は、皆無で、時期確定は不能であるが柱間360cm、200cmの尺度からみて恐らく17世紀前半期の側柱式建物と推定され、機能的には住居址でなく切妻形の倉庫と推定される。

6) 换立柱式建物第6号址（第9図 図版3）

前述の第5号址と、敷地を半ば重複する建物で、P 13-P 18の6柱穴によって2間×1間の規模を構成する摺立式の長方形プランをもつ建物である。桁行5m、梁行3mを測り、前述第5号

址と同形であるが、やや大きい。東側南部を、土壌第10号址に切られている。主軸はN-10°-Eを示す。

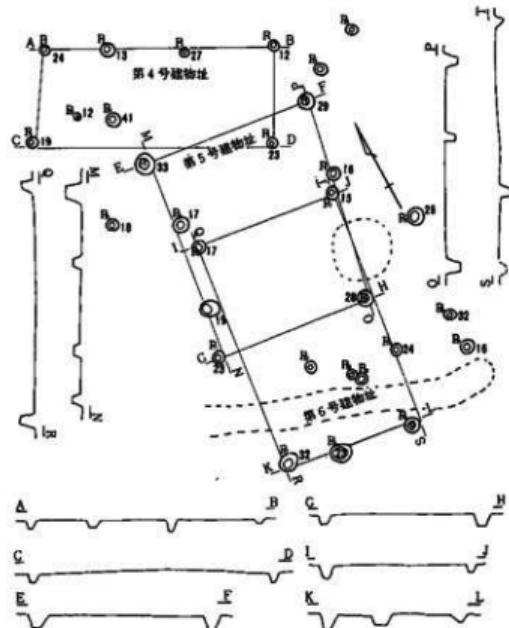
柱間は、東側柱間で350-150cmを測り、北側1間で500cmを測る。

柱穴はいずれも径40-30cm、深さ30-20cmを測り、それぞれやや格差をもつていて。

床面は何も痕跡を残さず平面的である。南部床面にP23-P25の柱穴3個が並ぶが、これに接して構第4号址が東西に走り床面を切っている。この遺構は後世のもので関係がない。

遺物は、東側に接し京焼風陶器茶碗(No.123)が共伴して出土していることからみて、17世紀後半期の掘立柱の側柱式の建物址と推定される。

おそらく、第5号址に引き続きその廃絶後、維続して再建されたもので、倉庫的機能をもつた建物と推定される。



第9図 第4号・5号・6号掘立柱式建物址実測図

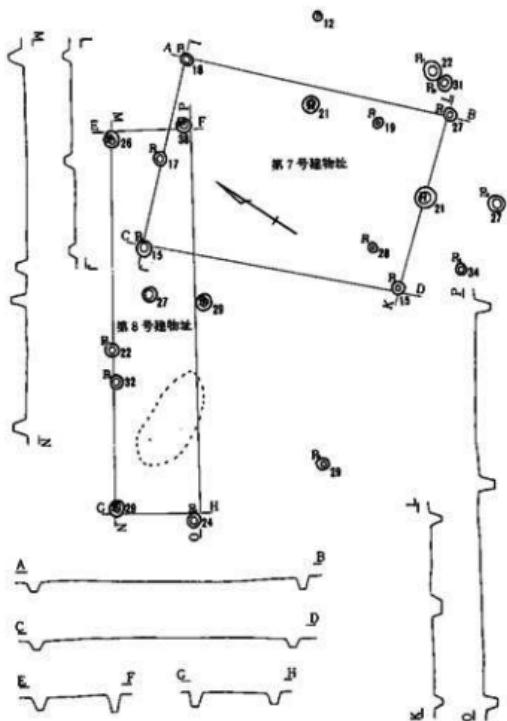
(S = 1 : 120)

7) 掘立柱式建物第7号址 (第10図 図版3)

B区の中央部、グリッド17・18・19～た・ち・づの位置に検出された柱穴群P1～P9によって構成され2間×1間(3間)の長方形プランをもつ掘立柱式建物址である。

桁行550cm、梁行400cmを測るが、南北側の中間にあらるべき側柱がなく、短い東西の妻側に中間にP3、P6があり、柱の配置が異状である。妻側の柱間は西側北より220cm-180cm、東側では北より180cm-220cmで互いに入れちがっている。柱穴の深さはP5で径30cm、深さ20cm、P3で大きいが、各柱とも較差が認められる。屋内床面はP7、P8が北側に、P9が南側直ぐにあるが、建物の構成には関係なく、他の時期によるものと思われる。主軸はN-55°-Eを示す。

出土遺物は、共伴するものは認められなかったが、南東3mに近接して、設けられた土壌13号から古瀬戸灰釉平鉢(No.50)内耳土器(No.11)が出土し、これらが15世紀後半の所産であることや、また南西6mの位置に、古瀬戸灰釉瓶子(No.52)の破片を出土し、これらが15世紀前半の所産であることなどや、側柱式の比較的大きな構造をもち、側柱の少ない点、第8号址と西側を切り合っている点などから、15世紀の掘立柱式建物と推定される。倉庫的な機能をもつ建物と考えられる。



第10図 第7号・8号掘立柱式建物址実測図 ($S = 1 : 120$)

8) 掘立柱式建物第8号址 (第10図 図版3)

第7号址の西妻側と直交し切り合う形で検出された建物址で柱穴P11～P17によって、構成される長方形の1間×2間の構造を持ち桁行7.6m梁行1.8mを測り、柱間は、南北妻側で180cmだが、東西に長い側柱間は、東側370cm-450cm、西側450cm-70cm-280cmと不定である。柱穴は、いずれも径20cm内外、深さはP12で38cm、P13で29cm、P11で26cmで平均30cm内外を測る。柱間不定の切妻造屋根を持つ長屋風掘立式建物が想定される。

遺物は、北側4～5mの位置に、黄瀬戸碗、鉄軸鑄鉢等17世紀所産の瀬戸窯陶器破片が出土していること、両妻側柱間が180cmという点などから17世紀後半期の建物と推定される。東西两侧柱が不定な点、柱が細い点などは四壁の構造は考えられず、おそらく貯蔵、集積の機能をもった建物と思われる。

9) 捩立柱式建物第9号址

(第11図 図版3)

D区の北端部グリッド2・3・4-む・め・もの位置に検出された柱穴群P1~P10によって構成されていた摻立柱式の建物で、内部中央に小堅穴が設けられていた。規模は2間×3間(2間)で桁行4.0m梁行3.0mの長方形プランをもつ小規模で特殊な構造を持つ。主軸はN-E°を示し、磁北に正中した南北棟の建物で興味深い。

柱間は、東側柱P6-P9にかけて160-90-160cm、西側柱P1-P4にかけて190-80-190cmを測る。中間のP2-P3、P7-P8の間隔は狭く、屋内の堅穴の両側に設置されている。

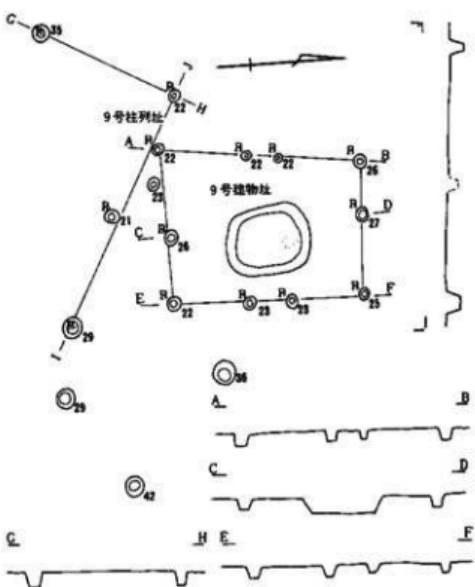
桁行は本来2間(1間2m)の変則であろう。妻側柱は北側で120-180、南側は190-130で柱間が相対せず逆対置してあり、南妻側が40cmほど長くやや変形した配置である。

屋内の床には何の微候もなく、中央に径170×130cm、深さ40cmの隅丸長方形の堅穴が設けられていた。堅穴内部は、底径140×110cmを測り、低平で北部に灰の散布が認められた以外に遺物は出土しなかった。

以上のように堅穴を覆うように架構された建物で、堅穴の性格が不明である。床面の灰の存在を手がかりにすれば墓壙であり、その墓壙を守るために覆屋とも考えられるが確認はない。

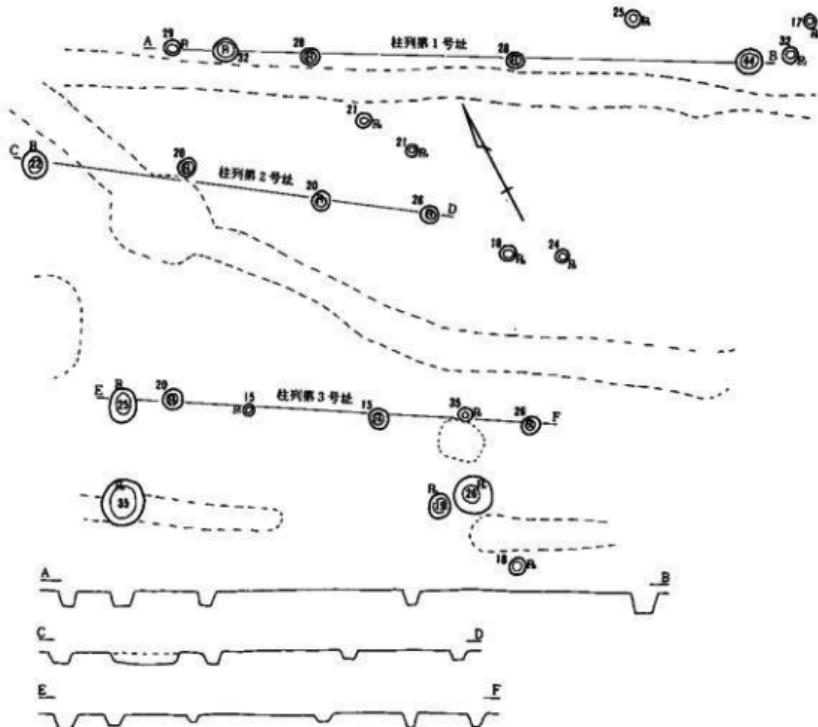
また堅穴が極めて重要なものを収藏する機能を持つとすれば、この防護のための建物とも推定される。

營造時期は、本址の周辺から中世-近世に至る陶片が多数出土していて、にわかに判定でき得ないが、最も近接した東側2mに内耳土器(Ne13)、古志野茶碗片(Ne53)などが出土しており、また柱間が200cm、180cmなどが多いことからみて、17世紀前半期のものと推定される。



第11図 第9号摻立柱式建物址・第9号柱列址実測図

(S = 1 : 120)



第12図 第1号・2号・3号柱列址実測図 ($S = 1 : 120$)

2 柱列址

1) 柱列第1号址 (第12図 図版2)

A区の最北端、グリッド2-レーベーの位置に検出された長さ12mの柱穴列で、P1-P4まで5個の柱穴がN-60°-W方向に直列する。柱穴は、P1で径、深さとも30cm、P4で径50cm、深さ40cmを測り、柱列群の内よく整っている。当初掘立柱式建物を想定したが南側発掘面には対応する柱穴は認められず、北側は道路に接しているため発掘できず不詳であるため、柱穴列とした。柱間は南側柱としても120-180-440-500とそれぞれ異なり西方から東方に向かって間隔が伸びており一応柱列址の性格をもつものとした。

遺物はP3-P4の間、P3に接して内耳土器片、P4北に接して古瀬戸縁軸小皿(No.9)その東側に瀬戸天目茶碗(No.89)等が出土しており、これらのことからほぼ15世紀初頭期のものと推定

される。

2) 柱列第2号址 (第12図 図版2)

柱列第1号址の南側3mの位置に、これとほぼ平行状態で長さ8.8mにわたって直列する柱穴P5、P6、P7、P8である。主軸方向はN-55°-Wを示し、柱間は320-300-220cmで、柱穴はP5で径45cm、深さ25cmを測り、他の柱穴もほぼ同じであり、前述の建物址に比べても劣らない。遺物は、P7北部に、古瀬戸灰釉碗 (No69)、P8東部4mに瀬戸灰釉碗 (No103) が出土しており、ほぼ、この時期即ち15世紀後半期のものと見なすことができる。

3) 柱列第3号址 (第12図 図版2)

柱列第2号址に平行して、南側4.5mの位置に検出された柱穴P9-P14に至る5個の直列7.6mを測る柱列址である。

主軸は、N-58°-Wを示し、第1号址、第2号址と、東西方向でほぼ並列状態である。柱間はP9から東へ160-280-220-150と不定であり、柱列第2号址と対応しない。

柱穴は、P9は大きく径50cm深さ25cmであるが、他の4柱穴は径35cm内外深さ20cm内外である。但し、南側1.5mの位置に7.5mの間隔をもって東西に並ぶP22、P24は規模の大きい柱穴で共に径80cm深さ30cm内外の規模を持ち柱列に並行して位置することから、当柱列址に伴うものではないかと推定される。或いはこの柱列を支える意味をもつ柱穴であると想定すれば、平屋根または片屋根の存在が推定される。

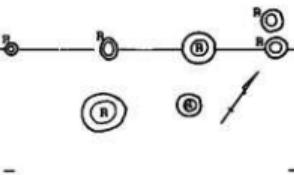
遺物はP14の南側に瀬戸鉄釉天目茶碗 (No38)、P11の南側から、内耳土器破片 (No20) を出土しており、ほぼ16世紀後半期の造営と見做すことができる。

4) 柱列第4号址 (第13図)

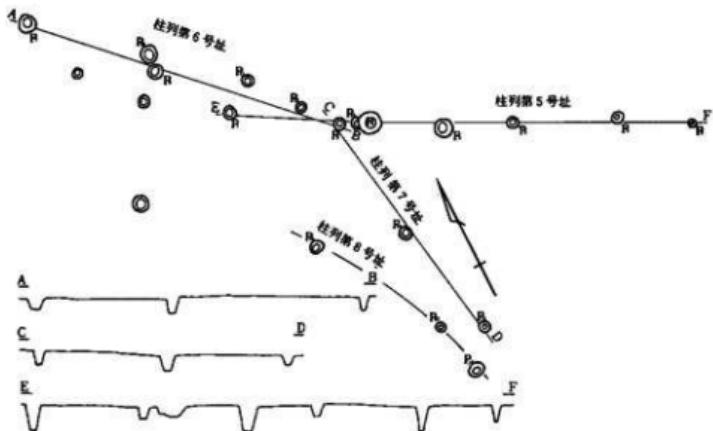
柱列第1号～3号址の西端部から8m西方の位置に、これと直交する主軸N-54°-Eの方向、すなわち南北方向に直列する4個の柱穴群P1からP4の列である。

柱間は200-200-180cmを測り、柱穴の規模は、差が大きくP1で径25cm、深さ30cm、P3は径60cm、深さ40cmを測る。なおこの柱列の南側1.5mに、P5、P6がほぼ並行して存在し、柱列第3号址と同様な機能をもつ柱の存在が想定される。

遺物は、P3の西北部側邊に瀬戸灰釉碗 (No92)、P4の北2mから瀬戸鉄釉壺鉢 (No28) が出土しており、これが17世紀代の所産であることから、ほぼ17世紀後半のものと推定される。



第13図 第4号柱列址実測図
(S = 1 : 120)



第14図 第5号・6号・7号・8号柱列址実測図 ($S = 1 : 120$)

5) 柱列第5号址 (第14図)

B区中心部、グリッド19-け・せの位置に検出された柱穴P1からP6の柱穴列で長さ9.8mを測り、主軸はN-60°-Wではほぼ東西方向に直列する。柱間はP1から220-180-140-220-160cmを測り不規則であるが220cmが基準と思われる。柱穴の規模もP1で径30cm深さ50cm、P2で径40cm深さ50cmを測り、それぞれ不定である。

遺物は、直属するものは認められずP2北側2mに瀬戸灰釉平碗(No.55)が出土しており、更にP3南側3mの位置に内耳土器破片(No.14)、古瀬戸天目茶碗胴部破片(No.48)等15世紀末等の所産のものや古瀬戸皿(No.59)等16世紀代の陶片が出土していることから16世紀前半期の造構と推定される。位置的にみても掘立柱式建物第7号址に共伴する施設であるかも知れない。

6) 柱列第6号址 (第14図)

柱列第5号址と交叉する状態で主軸方向N-43°-Eを示す柱列址でP7-P13に至りその間にP10、P11を重複接続させている。主軸方向はN-43°-Wを示す。長さ6mを測る。

柱穴はP7で径40cm深さ25cm、P9で径25cm深さ40cmを測り、規模は不定であり、柱間も300-400cmと不規則である。遺物は伴わず未定であるが、位置方向から見て、掘立柱式建物第8号址北端部に直交していることから、これに伴うものであるかも知れない。さすれば17世紀後半期に該当することになる。

7) 柱列第7号址（第14図）

柱列第6号址東端のP13に接するP9を北端とし、主軸N-10°-W方向に直列するP14、P15で構成される長さ約6mの柱列である。柱間は280cm-360cmと不定で柱穴はP9が径30cm深さ30cmを測り、他の2柱穴も同大で斎一性が認められる。遺物は中世土壙第11号に近接しているため、この出土遺物に近いものと考えられる。或いは土壙を囲む障壁の機能を持つかも知れない。

8) 柱列第8号址（第14図）

B区の柱列第7号址の西側に近接して並走する状態で検出されたP16、P17、P18の柱列である。長さ2.3mで柱間は1.3m-0.7mと不定である。

土壙第11号の北東側縁辺を切るような形で北側に伸びているが、これとの直接の関係はないと思われる。

遺物は周辺から出土しているのみであるが、15世紀代と思われる。

9) 柱列第9号址（第11図）

D区の掘立柱式建物第9号址に近接しその西南の位置に検出された柱列址P11、P12、P13、P14で構成される鍵形状の柱列址である。P12-P14間を主軸とすればN-60°-Wを示す。柱穴はP11で径35cm深さ35cm、P12で径、深さとも22cmを測り、他の2柱穴とも不定である。柱間もP11から300cm-280cm-250cmと不規則である。

遺物はP11の西側から瀬戸天目水瓶（No45）、瀬戸黒釉陶碗（No88）に加えて梅文染付陶器平碗（No155）黄釉染付陶皿（No154）等も伴出している。この南部一帯は、遺構は認められず、近世末陶器が多く出土している。掘立柱式建物第9号址との関係位置からみて17世紀後半もしくは18世紀前半に位置づけられよう。

3. 土 壤

1) 土壤第1号址 (第15図 図版6)

A区の東端グリット5.6-く、の位置に検出された堅穴状の方形土壙である。南北265cm、東西220cmを測る平面凸字形を呈する堅穴で、深さ50cmで、床面は低平で180cm×240cmの限丸方面を呈する。長軸はN-29°-Wを示し凸部は北方に向く。覆土は、真黒色で深さ20cmに厚さ5~6cmの敲き面があり、ローム粒を含んだ暗褐色を呈する堅緻な層の上面に、12個の自然縫が不規則に配置され、敲き面より下部25cmで堅穴底面に達する。間層は暗褐色を呈し下部の四周は混ローム層が流れこんだ状態で10cm内外の堆積が認められた。なお敲き面下部の間層には炭末が多く混在した。

遺物は少なく、鉄軸片口 (No27) 破片、および墓石状石器1個が敲き面上面から出土した。本址の性格については、以上のように特異な形態であるが、遺物も少なく明確に判定し難いが、17世紀以後半期における宗教儀礼にかゝわるものと推定される。

2) 土壤第2号址 (第15図 図版6)

A区の東北端、グリッド3-さ、この位置に検出された隅丸長方形プランの浅い皿状堅穴である。

規模は、平面3.8m、南北1.8mを測り、床面はやゝ固く深さ1.5m、底面の広さは堅穴状縦径に比して20cmほどと狭く、壁はゆるやかに傾斜する。床面には中軸に沿って南よりに径10cm内外の小穴が直列状に並び、中央より東よりに、径20cm内外の柱穴4個が配されているが深さが10cmほどで、後世の掘りこみである。堅穴の主軸は、N-60°-Wを示す。

遺物は、弥生式後期土器小片、内耳土器 (No19)、瀬戸黒釉茶碗 (No81)、古鐵部焼向付 (No.3) 等が出土し、小破片ながら、当遺構中、優品を多く出土した遺構のひとつである。

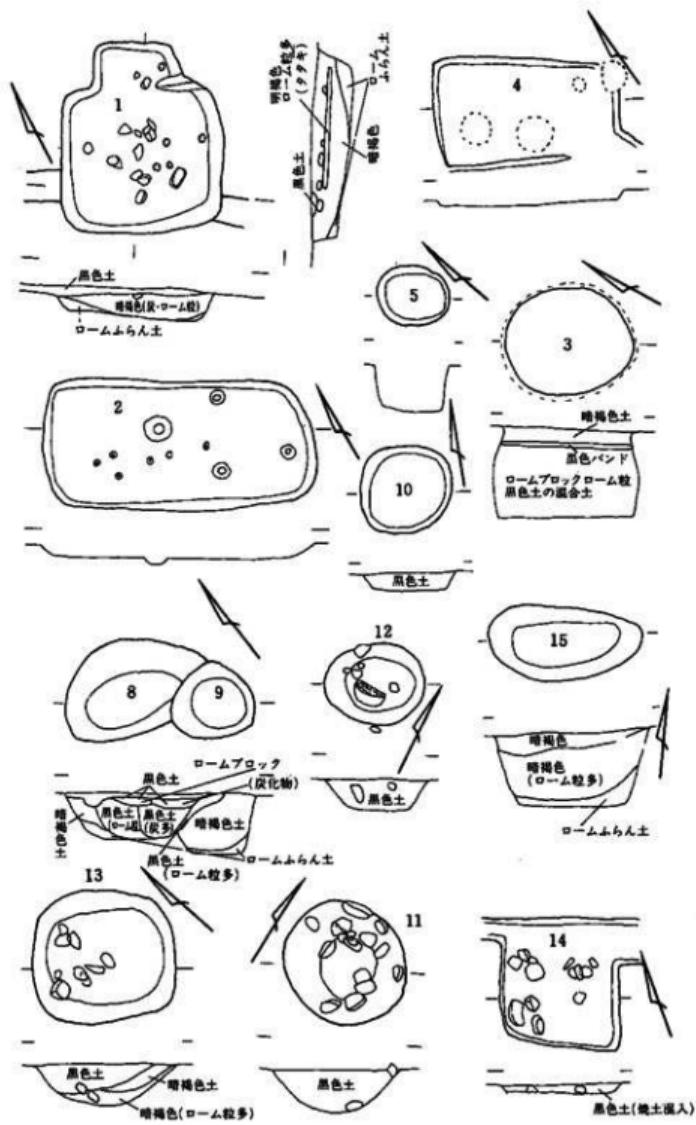
この堅穴状土壙の機能については、生活的な要素が認められるものの決定的な条件がない。

時期的には、17世紀前半期のものとしてよいであろう。

3) 土壤第3号址 (第15図、図版6)

土壤第2号址の北縁に接するかのような位置に検出された円形ドラム缶に近い土壙である。口径180cmに比して底径190cmでやゝ袋状を呈し深さ155cmを測る。地盤のハードローム層を掘りあげているため、直壁面は固く、底面も平らで堅緻である。覆土の形態は、土壙上面より20cmは暗褐色を呈する土層、その下部に厚さ6cmほどの黒色バンドが全面に覆い、その下部は床面に達する厚さ100cmの黒色土層であった。この層は水分に乏しく、ロームブロックが混入し黒味の強いばさばさした土で特殊な有機物腐植体と思われる。

遺物は、全く出土せず、その時期も判定し難いが、土壤第2号址に伴うものではなかろうか、形態的には、貯蔵機能をもつ堅穴であることは確実である。



第15図 中世土壤実測図 (S = 1 : 80)

4) 土壙第4号址 (第15図)

同じくA区のグリッド6、7—こさの位置に検出された長方形竪穴である。ここでは、各造構が第IV層まで切り分れ複数している。即ち南縁部を溝址第3号に切られ、更に掘立柱式建物第2号址と同第3号址の切り合う地点に位置し形状は確定的ではないが、1辺260×160cmを測る長方形で主軸はN-40°-Wを示す。深さ15cmの床面は低平でやゝ固い。壁はやゝ傾斜している。

床面から内耳土器片 (No.22)、瀬戸天目皿 (No.83) を出土した。17世紀前半のものと考えられる。

5) 土壙第5号址 (第15図)

同じA区のグリッド6—その位置に検出された円形の小形土壙である。口径100×80cmを測る梢円形で深さ60cmの直壁で断面桶形を呈する。覆土は、暗褐色で他の中世土壙と同じ、底面も80×60cmで低平である。

遺物は皆無であるが覆土からみて中世末以降の土壙と考えられる。

6) 土壙第8号址及び第9号址 (第15図)

B区の北端、グリッド11—さ、し、の位置に検出された大きな梢円形土壙である。口径は東西220cm×南北120cm、深さ90cm、底形は100cm内外でローム層を断面したゆるいU字形に穿った土壙である。

やゝ深いタライ状で、内部堆土は、下部ローム腐乱土、中部は厚さ40cm内外の暗黒色土で炭末の多い部分、ローム粒を含む部分、暗褐色の部分に分けられていた。上部は黒色土、ロームブロック層15cm内外で、三層構造をもっていた。中部層が収納物であったと思われる。長軸の方向は、N-43°-Wを示す。東端部を第9号址と切り合っている。

遺物包含は認められず、堆土の状態から中世以降の土壙と推定されるのみである。

第9号址は、前述のように第8号址を切り、外周を共に内接して存在した、長径120cmの不整円形で深さ120cm、底面は低平径100cmを測り、直壁で桶状を呈した土壙である。内部堆土は暗褐色を呈していた。

7) 土壙第10号址 (第15図)

B区のグリッド16—この位置、こゝは掘立柱式建物第5号址、第6号址が切り合った地点で、この建物の東側柱線が中軸を通っている。径130cmの円形を呈する土壙で深さ40cm、底径100cmを測る。内部は黒色土が堆積していたのみで遺物は出土しなかった。第5号址側柱を破壊していることから、17世紀以降に造られたものである。

8) 土壙第11号址 (第15図 図版6)

B区の南端グリッド21.22—し、の位置に検出された円形土壙で口径180cm、深さ100cm、底径70cm内外で断面ナベ形を呈する。縁辺の1部と底面に枕大自然石14個が二重におかれていた。堆土は黒色土で、堆土中から灰釉陶器杯 (No.1)、弥生式土器小片、瀬戸鉄釉茶碗片 (No.73) 宋銭「至和元宝」を出土し、北縁外側から黄瀬戸皿 (No.59)、内耳土器 (No.14) 等を出土した。

古鏡・内耳土器からして、その時期は、15世紀後半期のもので、排水用土壙と推定され、掘立柱式建物第7号址に付設されたものと想定される。

9) 土壙第12号址 (第15図 図版6)

B区のグリッド22-せの位置に検出された円型の土壙で、土壙第11号址の西2mにこれと並列する。堆土は黒色土が充満し、堆土中に長径50cmの石及び礫数個が包含されていた。

遺物はなく、口縁北東30cmの位置から古瀬戸天目茶碗(№48)、同南縁外側から天目茶碗(№90)が出土しており、前者は15世紀後半、後者は17世紀前半の所産である。時期的には16世紀前半と推定される。土壙第11号址、第13号址と同形で、排水用土壙と想定される。

10) 土壙第13号址 (第15図 図版6)

土壙第11、第12号に引きつづきその西方に2mの位置に直列上に位置する大形の円型土壙である。口径東西200cm 南北180cmを測る精円というよりむしろ隅丸方形に近い形を呈し、深さ90cmでそこは丸く長径170cmを測る。ハードローム層を掘りこんだ壁は固くゆるく傾斜し、断面ナベ形を呈する。堆土は底部10cmは暗褐色でローム粒を含み、その上部は口縁上面までに流れこみ状に2層、下層は暗褐色土、上層は黒色土である。最下層に枕大の石10個が配石されていた。いわゆるメクラ排水用土壙であろうか。

内部堆土中から、土師器の破片、古瀬戸灰釉おろし皿(№61)、古瀬戸灰釉平鉢(№50)等破片を出土した。これらの遺物から15世紀後半期の土壙と思われ、掘立柱式建物第7号址との関係が濃厚である。

11) 土壙第14号址 (第15図、図版6)

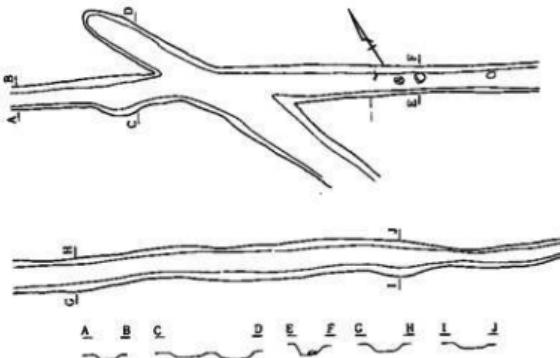
B区の中央、グリッド18-しの位置に検出された浅い方形堅穴である。北辺を溝址第4号が横断している。北縁は不詳であるが、溝北側線より北に伸びないのでまずこの北側線を堅穴北辺として、南北170cm、東西160cmを測る方形を呈し、深さは30cm、底辺は100cm内外で低平である。内部は枕大の石4~6個が3ブロックになって配石され、焼土、灰、炭化材が覆っていた。

遺物は、東壁下から、瀬戸灰釉平碗(№55)破片が出土した。この遺物を基準として17世紀前半期における屋外炉址と判定した。あるいは建物第6号址や建物第5号址と関連する焚火施設であったかも知れない。

12) 土壙第15号址 (第15図 図版6)

B区のグリッド20-しの位置に検出された長精円形土壙である。長径220cm、短径11cm、深さ150cm、底面は低平で、長径140cm、短径100cmを測る。直壁で断面オケ形を呈する。

堆土は3層構造で整合し下部はローム腐乱土で薄く、中層はローム粒の多い暗褐色土で厚さ70cm、上層平均25cmで褐色土で各層整合しており、何らかを埋納したものと思われる。堆土状態からみて他の中世土壙と同様であり、中世末以降の設営と考えられる。遺物は全く伴わない。



第16図 第1号溝址実測図 ($S = 1 : 120$)

4. 溝 址

1) 溝第1号址 (第16図 図版2)

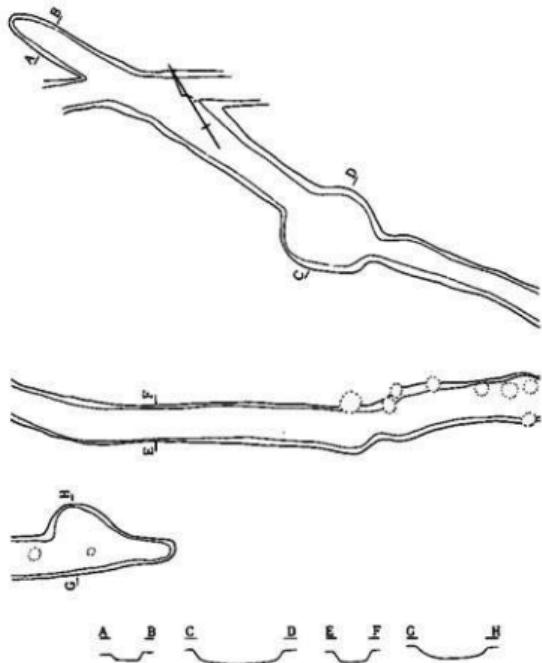
A区北端のグリッド2-さ、に至る長さ23m、幅1~1.5m、深さ20cmの溝で第三層ローム上面をわずかに掘りこんだ程度の浅い溝である。中軸線はN-60°-W方向を示す。配石や砂層等は認められず単純な構造である。

遺物は、溝内からはほとんど認められず外側から18世紀代以降の陶片、例えば、瀬戸焼皿(No.99)、壺鉢(No.172) 破片が出土している。特に東部分では周辺から15世紀代、16世紀代の陶片が出土したが土壤第2号址等に近接しているのでこの関係と思われ、これを除くとほとんど18世紀後半から19世紀のもののが多出している。これらのことから、18世紀後半のものと推定される。

2) 溝第2号址 (第17図 図版2)

A区の北西端、グリット1.2~け、にの位置に、溝第1号址に平行する状態で展開した溝址である。但し西部では北方向に曲がり溝第1号址の西端と交叉している。長さ27m、幅100cm~60cm、深さ30cm内外で走向中軸線はN-60°-W方位を示し東西方向である。

遺物は、第1号址と同じく、内部には出土せず、縁辺から18世紀、19世紀の陶片を多く出土している。同じく18世紀後半期以降に掘削されたものであろう。内部から何の堆積もなくまた流水状態を看取ることはできない。

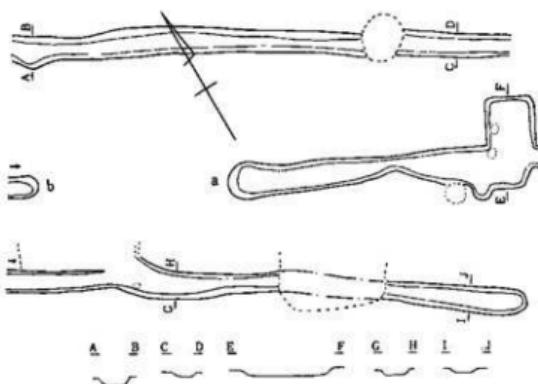


第17図 第2号溝址実測図 ($S = 1 : 120$)

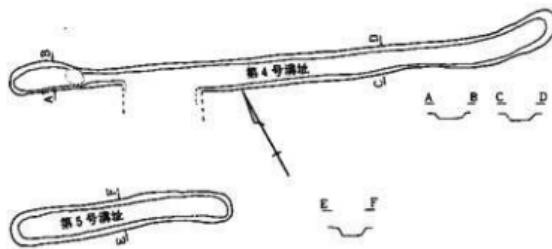
3) 溝第3号址 (第18図 図版2)

A区の南端、グリッド6-か・にに至る東西方向に位置する溝址である。溝第1号址とは8.4mの間隔をもって東西方向に走り、その間に第2号址も並行している。但し本址は中間グリットた。その位置で4m間断裂し、東西に区分される。ために、東溝をa溝とし、西溝をbとする。a溝は17.5m、b溝は10.5mを測るが幅は80cm~60cmで深さは20cm~25cmを測る。走向はN-62°-Wを示す。

遺物は、a溝東部で中世末陶器を出土しているが、前述のように建物址第2号、第3号を切り土壙第1号址、第4号址を切るので、この関係の遺物と思われる。残る遺物はほとんど18世紀代、19世紀代の陶磁器破片が多い。例えば、京焼風茶碗 (No.124, No.150), 染付磁器小皿 (No.183) 等である。従って、19世紀代以降の掘削と考えられる。機能も前2溝と同じく未詳である。



第18図 第3号溝址実測図 ($S = 1 : 120$)



第19図 第4号、5号溝址実測図 ($S = 1 : 120$)

4) 溝第4号址 (第19図 図版)

B区の中央部 グリット17、18—こ、せにかけての位置に検出された東西方向に走る溝址で掘立柱式建物第6号址、中世土壤第11号を横断している。長さ11.8m、幅65cm内外、深さ20cm内外である。方向はA区の3溝とほぼ並行しN-65°-Wを示す。遺物は全く出土しない。おそらく前3溝と同時期のものと思われる。

5) 溝第5号址 (第19図 図版)

B区の南端、グリット20、21—く、け、この位置に東西方向に走る長さ5mの溝址である。幅70~60cm、深さ65cm内外で短いながら、第4号址と平行し、走向N-68°-Wである。

南東部から19世紀代陶片の瀬戸鉄釉平鉢 (No.33)、カントン茶碗 (No.156) 等を出土しており、前溝址同様近世末期の掘削と考えられる。

5 遺物

1) 陶磁器 (第20図 口絵カラー)

陶磁器は、発掘区全面から出土し、主として第III層黒褐色土層に包含されていた。出土分布状況からみると、A区の全面、B区東半部、C区全面に濃密な分布状況を示した。前述の掘立柱式建物址、柱列址、土壤群、溝址等の各遺構の位置する部分およびその周辺が、陶片出土の濃密な地帯であった。

陶器の総数は、破片数で総計210点を数え、いずれも器形を圖上復元でき得ないような細片である。この細片の多いことは、遺構の性格を暗にものがたっているのかもしれない。

陶片を時期別にみると15世紀代のもの24点、16世紀代のもの32点、17世紀代のもの41点、18世紀代の陶磁片が最も多く27.1%を締め、次いで18世紀代20%、19世紀代19.7%とほど等しく、16世紀代15.3%、19世紀代11.5%、20世紀代6%の順序で低減している。この土地の生活上の利用率の変遷をものがたっているようである。

しかしながら、陶磁片の質的な面では、15世紀代、16世紀代は供獻的な性格を帯びた優品が多く、18世紀、19世紀には、食器等の日常雑器が大部分を占めるようになる。これはこの土地の利用の質変化をあらわしているよう。

いずれにしても、16世紀後半期から17世紀代にかけての陶片が遺構に伴って出土した点は、考古学上の新知見であり、重要視しなければならない。

陶片の要目は一覧表に掲げたので参照されたい。こゝでは各時期別にその代表例を挙げてやる詳述したい。

(1) 15世紀代 (第20図1~5)

1は、明代中期所産の青磁茶碗口縁部 (No.2) である。器厚4mmで胎土白灰色を呈し、極めて堅緻、全面に淡青黄色の釉薬が厚くかけられ、外面には簡素な連弁が並列状に線彫りにより表現されている。全体に細かな貫入が認められる。g r 3-す第III層出土。

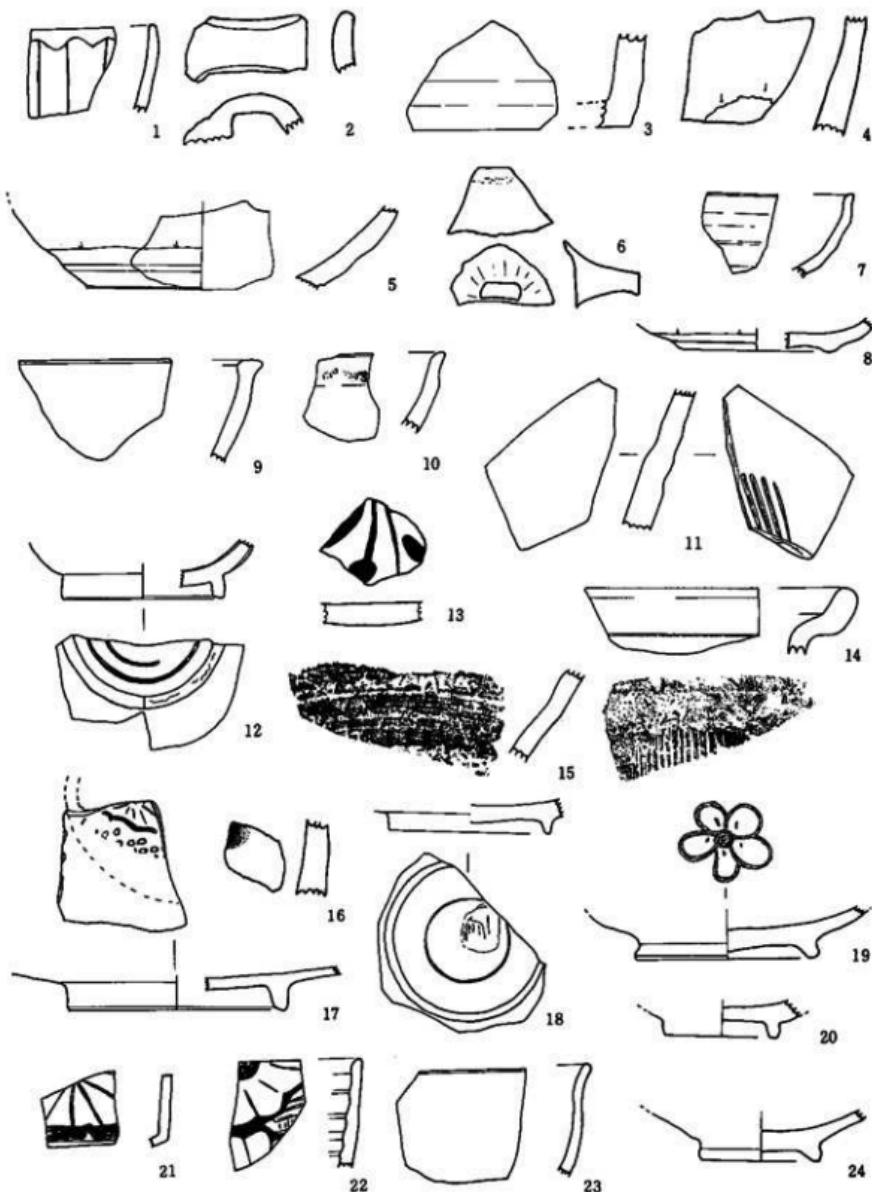
2は、古瀬戸灰釉四耳壺の耳状把手のひとつである (No.60)。幅1.9cm、長さ4.9cmを測る。胎土は淡褐色を呈し、その上に淡緑色の灰釉が厚くかけられ貫入は極めて細かい。上面に耳通有の沈線がないので、後半期のものと思われる。(D区出土)

3. 内耳土器の底部、外線の立ちあがり部分 (No.12) である。内耳土器は、15片ほど出土しているが、微片が多く、これはその代表で最も大きい。厚さ12mmを測り、胎土粒子細かく、赤褐色で内外面にヘラ調整痕を残す。g r 11-ふ III層出土。

4は、古瀬戸灰釉瓶子の胴最下部立ちあがり部分 (No.51) である。厚さ13mmで胎土灰青色で長石粒が入り堅緻、内部はロクロ整形痕が残される。外面は、淡黄緑色の灰釉が施され、貫入は微細である。

前半期も初頭の所産と認められる。g r 22-と第1層出土。

5は、古瀬戸天目茶碗の底部立ちあがりから胴部に至る断片 (No.38) である。胎土は淡黄色で堅緻、外面立ちあがりは生地で、他の内外共に褐色を含む黒色釉がかけられている。後半期所



第20図 出土陶磁器実測図 ($S = 1/2$)

産のものと思われる。g r 3-とⅢ層出土。他に同個体頸部断片（No.54）がある。

(2) 16世紀代 （第20図 6～9、16）

6は、素焼き内耳土器の耳状把手部分断片（No.17）である。器面に突出するようにとりつけられた台形上の把手の長さ2.3cmを測る簡素なものである。全体茶褐色を呈し胎土は細かく、よく調製されている。後半期の所産であろう。

7は、古瀬戸鉄釉天目小鉢の口縁部断片である。器壁薄く口唇部で3mmを測る。胎土は白灰色出、器面内外ともよく調製され、外面にロクロ底幅9mmが上下に並列して残されている。内外共に黒色を斑にまじえた暗褐色釉がかけられている。前半期の瀬戸窯所産。g r 22-とⅠ層出土。

8は、瀬戸天目釉小鉢の底部断片（No.72）である。前項7と同個体と思われる。器壁薄く、底面に3mmほど切りこんだ削り高台造りである。高台、器体の内外全面に黒色ならびに褐色釉が施され、器面の色は沈みがちである。高台形5cm内外を測る。g r 22-と出土。

9は、美濃鉄釉擂鉢の口縁部断片（No.34）である。口唇部で内外面で急に膨らみ、口唇面は平に調整されている。器壁6mmで胎土は軟く白色、粒子は細かい。内外面共に黒色の濁った釉が厚く施され点滴状に厚く残っており、いわゆる鬼板風の施釉である。後半期の美濃産。g r 2-ゆ第Ⅲ層出土。

10は、黄瀬戸鉢の胴下底部の断片の1部（No.134）である。底部のため器厚11mm、胎土は淡器白色を呈し、やゝ軟かく粒子は微細である。器面の内外面ともによく調整され、内面は淡黄色の釉が施され、おちついた光沢を保っている。右端に緑色のタンバン文が認められる。

外面には下半分は、淡褐色釉で二条の横走線が描かれ、上半に薄く、淡黄色釉が施されている。美濃窯所産で16世紀後半と思われる。他に3片が出土している。g r し-3出土。

(3) 17世紀代 （第20図 10.11.13）

10は、古志野碗の口縁部断片（No.6）である。口縁部はやゝ内湾し、胴上部から膨む器形である。胎土は明るい白色でやゝ軟かく、粒子は微細である。器面の内外ともによく調整され、全面に白色釉が厚く施され、口唇外面の1部には泡状に固まる。釉色は全体にクリーム調で深みのある光沢を持っている。美濃窯17世紀前半の所産と思われる。他に3点の細片が出土している。g r 2-いⅡ層出土。

11は、鉄釉擂鉢胴上部の断片（No.28）である。胎土は淡器白色で器厚11mmを測り、器内面に細沈線5条が1cm幅で下縦方向に付けられこのスリ目的間隔は3cm以上である。外面には幅1cmほどのロクロ目を残している。器面全面に濁った褐黒色の鉄釉が施されている。g r 3-な出土。後半期の美濃窯所産。

13は、古鐵部向付小鉢の底部見込部分の断片（No.3）である。胎土淡綠白色を呈しやゝ堅く焼きしめられている。内面には、鉄釉で暗褐色の壘格文が美しく描かれ、全面に淡黃白色の釉が施されている。裏面には、ロクロ中心部の曲線痕が残され無釉である。厚さ12mmを測る、前述の内面の施文は、いわゆる「辻が花」文様で初期鐵部焼に表現された特有の文様である。前半期の美濃窯所産であり、県内発掘調査での出土は所見で 今後重視しなければならない。 g r 3-く第Ⅲ層出土。

(4) 18世紀代 (第20図. 12. 14~19)

12は、瀬戸焼茶碗の底部 (No102) 断片である。灰白色胎土は堅緻で、ガラス質の強い淡青緑色のガラス質釉が厚く施され、貫入が強い。青磁様の作調が認められる。高台部分は付高台で、無釉で、内部に強い沈線のロクロ痕が残されている。前半期の所産。

15は鉄釉擂鉢の胴上部断片 (No37) である。厚さ8mmの黄白色胎土で長石大粒子を含み堅く焼きしめられ、内面に14条1単位のスリ目沈線が施され、スリ目の幅1.5cmと比較的狭い。外面にはハケ目整形痕が回転状に残され、内外面共に薄く鉄釉が施され、茶褐色で濁った色調である。前半期の所産。E区表面採集品。

14は、鉄釉擂鉢の口縁部断片 (No39) である。口唇は厚く丸みを帯び、口縁下部で外反し急に立ちあがる器形である。白色胎土で、堅さは中位、器面内外ともに鉄釉が施され無光沢の暗褐色の色調である。後半期の所産。g r 7—せ出土。

17は、染付皿の底部断片 (No153) である。胎土白色で器壁4mmの厚さで極めて薄い。焼成は中位で、花文が描かれている。窯は不明であるが18世紀前半の所産である。他に蓋の断片 (No154) が出土している。g r へー9Ⅲ層出土。

18は、灰釉椀の底部 (No96) である。底部の厚さ6mmで、径5.6cmの削り出し高台の高さ4mm、幅4mmが比較的優雅な作調である。全面にガラス質の強い淡緑色の青磁風の釉薬を施し、光沢の強色調を呈する。20図12の碗と同じく青磁調を模した作品であろう。後半期の所産と思われる。g r 16—な第II層出土。

19は、梅文染付平碗の底部断欠品 (No155) である。厚さ6mmの底部に径7mmの削り出し高台が付けられ、全面を暗灰色の釉が施され、貫入度は高い。内面の見込み部分に径3cmの梅の花一輪が描出されている。暗青色の染付手法になっている。後半期の所産である。g r むー6出土。

(5) 19世紀代 (第20図 20~24)

20は、志野様茶碗の底部断片 (No97) である。胎土は淡黄の白色で軟かく、粒子は細微である。底部の厚さ5mmで、削り出し高台の径4.3cm、高さ5mmを測る。高台下面を除いて全面に、クリーム色の釉が施され貫入が細かく貫一性があり、一見京焼風の茶碗である。或いは前掲No10の志野茶碗の釉調に似ているので、志野焼を模したものとも思われる。前半期の所産。D区表面出土。

21、染付藍絵湯のみ茶碗 (No164) の胴下底部断片である。厚さ4mmの陶質胎土は、黄白色で固く焼きしめられて堅緻である。外面に青色コバルト釉による花文が描出されている。染付手法を陶器で模した作品として興味深い。前半期の所産。g r 24出土。

22は、広東碗といわれる染付湯呑 (No156) 口縁部断片である。厚さ3mmで白色堅緻名胎土に透明釉がかけられ外面はコバルトによる花文が描かれている。透明釉が全面に施されていて内面にロクロ目が認められる。陶器による染付手法の作品である。前半期の所産。g r 22—か出土。

23は、白釉様茶碗の口辺部断片 (No167) である。口縁部外半し、器厚4mmを測り、白色胎土の粒子は微細で堅く焼きしめられ、全面に透明な釉が施され、器面、光沢ある灰色を呈す。

後半期の作品。g r 2—そ出土。

24、鉄釉平茶碗底部 (No172) 断欠品である。厚さ5mmの白青色胎土は固く焼きしめられ、径4.3cm

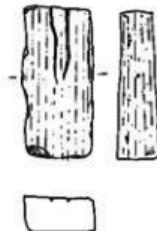
高台が削り出しで作出され、器の内外面ともに7:3の割合で鉄釉と灰釉でぬりわけられている。前半期の所産。g ゆー3出土。

以上、世紀別に分類して述べたが、19世紀後半期および20世紀の近代磁器は省略することとした。

2) 石製品

(1) 磨石 (第21図 図版7)

白灰色泥岩を扁平な直方体に加工した金属器研磨用の砥石である。長さ7.5cm、幅3.3cmを測る。表正面および裏正面は平滑に磨滅しており、厚さ1.8cmを測る。右側面も直線状に平滑に研磨調整されているが、左側面は打剥されたままで、下辺部もやや研磨してある。注目すべきは、表正面の上部縁辺の中央部に、中軸線に沿って、幅1mm、深さ1mmほどの溝2条が長さ4cmほどであるが、ほぼ平行沈刻されている。のみ状刃のものの刃角研磨用として用いられたものと思われる。グリッド19-け第III層より出土。



第21図 出土砥石実測図

(S=1/3)

(2) 基石 (第22図)

直径2cm内外の基石が2個出土した。現代使用のものに比して、やゝ小形で粗雑な製品であり、出土層位からみて、近世以前のものと思われる。

1は褐色泥岩を原料とした径18mm、厚さ6mmの円盤で周縁は丸く、研磨調整してあり、表側の面も曲面をもち、断面凸レンズ状によく研磨調整してある。特殊な豊穴状土壤第1号南側グリッド7-く第II層出土から出土した。或いは祭具のひとつかも知れない。

2は、粘板岩を原料とした径20mm、厚さ3.5mmの円盤であるが、やゝ不整形である。表面は、破損部がありやゝ荒れているが裏面は研磨され、特に周縁はよく研磨されている。グリッド22-け第II層出土で、中世陶器を出土した土壤第11号周辺の位置である。

13) 古銭 (第22図 図版7)

発掘区内から古銭3枚が出土した。いずれも、青銅鑄造品で、渡来銭である。

1は、「至和元宝」で、内帯部に右回り陽刻鑄造篆書体の表記が認められる。径23mm、厚さ1.2mm、中央方形孔1辺7mmを測る。

1054年から1055年に中国・宋朝、大宋の至和年代の铸造品である。11号土壤出土。

2は、「聖宗元宝」の陽刻鑄造篆書体の表記が判読される。腐食・磨滅がはなはだしくもらい、径24mm、厚さ1.3mm、中央方形孔1辺6mmを測る。宋朝・徽宗帝・建中靖国元年(1101)の铸造である。グリッド32-1の第III層より出土。

3は、「元祐通宝」の陽刻鑄造篆書体の表記が認められる。径24mm、厚さ1mm、中央方形孔1辺7mmを測る。铸字は明らかであるが、外帶の腐食がはなはだしい。

宋朝、哲宗の元祐年代（1086）の铸造である。グリッド10-ま第Ⅲ層の出土。
以上すべて、宋朝銭であり、11世紀後半から12世紀初冬の約50年間の所産であり、鎌倉時代以降、わが国に輸入され特に室町時代以降盛んに流通した貨幣である。



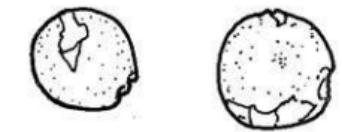
1



2



3



4



5

第22図 出土古銭・墓石 (S=1/1)

出土陶器要目一覽表

番号	陶器名称	時代(世紀)	器形	部分名	mm厚	胎土色	釉色	文様等	出土位置
C1	灰釉陶	9後	环	口縁	3	白	灰白	外面ロクロメ	11号土壤
2	青磁(明)器	15前	碗	口縁	3.0	黄白	淡绿	連華文	ナ-3-Ⅲ
3	古藏部陶	17前	向付	見込	6	黄白	黄白	跳ねヨクラク文辻ヶ花	カ-3-Ⅲ
4	古志野陶	17前	碗	胴	6	黄白	白		ホ-11-Ⅲ
5	古志野陶	17前	碗	胴	6	灰白	灰白		4-T-6
6	古志野陶	17前	碗	口縁	6	白灰	白		イ-2-Ⅱ
7	古志野陶	17前	香炉	口縁	3.5	白	白	削離	テ-6-Ⅲ
8	瀬戸白釉	18前	小壺	胴	5	白灰	白		5-11-1
9	古瀬戸鉄釉陶	15後	浅鉢	口縁	5	白黄	淡褐	緑釉	そ-2-Ⅱ
10	内耳土器	15-16	鍋	胴	7	褐色	褐		ち-5-Ⅲ
11	内耳土器	15-16	鍋	胴	7	褐色	褐		ホ-6-Ⅲ
12	内耳土器	15-16	鍋	底部	7.0	褐色	褐		フ-11-Ⅲ
13	内耳土器	15-16	鍋	口縁	7.0	褐色	褐		ミ-2-Ⅲ
14	内耳土器	15-16	鍋	胴	7.0	褐色	褐		ス-22-Ⅲ
15	須恵器	9前	杯	口縁	4	灰	褐		ミ-9-Ⅲ
16	内耳土器	15-16	鍋	胴	8	褐	褐		チ-2-Ⅲ
17	内耳土器	15-16	鍋	耳(外耳)	6	褐	褐		ガ-7-Ⅱ
18	内耳土器	15-16	鍋	胴	9	褐	褐		フ-5
19	内耳土器	15-16	鍋	胴	6	褐	褐		さ-3-Ⅲ
20	内耳土器	15-16	鍋	口縁	6	褐	褐		チ-6-Ⅲ
21	内耳土器	15-16	鍋	?	4	褐	褐		セ-1-Ⅱ
22	内耳土器	15-16	鍋	胴	4	褐	褐		4号土壤
23	内耳土器	15-16	鍋	胴	3	褐	褐		24-II
24	内耳土器	15-16	鍋	胴	7	褐	褐		セ-9-Ⅲ
25	内耳土器	15-16	鍋	胴	7	褐	褐		12-T 2-Ⅲ
26	铁釉陶	18前		口縁	6	灰黑	黑	有段	つ-16-Ⅱ
27	铁釉陶	18後	片口	底削高谷	7	白	褐		1号土壤
28	瀬戸(サビ風)	17後	擂鉢	胴上部	8	黄白	褐黑	ロクロメオロシメ	3-な-Ⅲ
29	瀬戸陶	18後	擂鉢	胴下部底	15	黄白	褐黑	裏おろしめ	6-ひ-Ⅱ
30	瀬戸陶	16後	鉢	胴下部底	13	黄白	黑褐		セ-6
31	铁釉陶	17前	擂鉢	底	8	黄白	黑褐	おろしめ	21-に-Ⅱ
32	铁釉陶	17後	ロハグ皿	削離	3.5	黄白	褐		6-ち
33	铁釉陶	19前	鍋	底	7	黄白	褐		22-か-1
34	铁釉陶	17前	鉢	口縁部	7	黄白	褐黑	厚釉	ゆ-2-Ⅲ
35	铁釉陶	19前	鉢	?	?	?	?		6-7-Ⅲ
36	铁釉陶	17前	蓋	中心部	3.5	灰白	褐黑	ロクロメ	C-2-Ⅱ
37	铁釉陶	18前	擂鉢スリノ皿	口縁上部	80	灰黄	褐黑	表採C-37	
38	铁釉天目陶	16前	擂鉢	胴部	7.0	灰色	黑褐		3-と-Ⅲ
39	铁釉陶	18前	擂鉢	口縁	7.0	灰黄	褐黑		セ-7-1
40	黒釉陶	18前	茶碗	胴	7.0	灰白	黑褐		セ-1-Ⅱ
41	黒釉陶	18前	茶碗	口縁	4	灰白	黑褐	釉流れ	セ-2-1
42	古瀬戸天目陶	15後	碗	胴下	7	灰白	黑褐		ホ-5-Ⅲ
43	古瀬戸天目陶	15後	碗	胴	5	灰白	黑褐		さ-12-Ⅱ
44	古瀬戸天目陶	15後	碗	胴	5	黄灰白	黑褐		12-T 2-2-Ⅲ
45	古瀬戸天目陶	16後	瓶	頸部	7	灰白	黑褐	(大窓)	2-も-Ⅲ
46	古瀬戸鉄釉陶	15後	碗	胴	6	黄白	褐	(大窓)	ミ-9-Ⅲ
47	天目陶	17前	茶碗	胴下	5	黄白	黑		つ-4-Ⅲ
48	天目陶	15後	茶碗	胴	5	灰白	黑		し-21-Ⅲ
49	古瀬戸灰釉陶	15後	壺	胴下	12.5	灰白	淡绿		と-22-1
50	古瀬戸灰釉陶	15後	平鉢	口縁	5	灰白	淡绿	(緑釉)	13号土壤
51	古瀬戸灰釉陶	15前	蓋子	胴	10	灰白	淡绿		と-22-1-Ⅲ

番号	陶器名称	時代(世紀)	器形	部分名	mm厚	胎土色	釉色	文様等	出土位置
52	古瀬戸灰釉陶	15前	瓶子	胴下部	10	灰白	淡緑		と-22-1
53	古瀬戸灰釉陶	15前	皿	口縁	5	白灰	緑		ゆ-2-III
54	古瀬戸灰釉陶	15前	壺	頸部	8	白灰			け-2
55	瀬戸灰釉陶	17前	平碗	胴下	6	灰	青淡	黒地	18-C-1
56	古瀬戸灰釉陶	15前	鉢	底		黄白	内緑外褐	ロクロ目	32-そ-Ⅳ
57	瀬戸灰釉陶	18後	碗	底削蔽	4	黄白	内緑外褐		1-せ-Ⅱ
58	瀬戸灰釉陶	18後	香炉	口縁-底	5	黄白	内緑外褐		区1住
59	古瀬戸灰釉陶	16後	折緑深皿	口縁	6	灰白	灰		さ-22-Ⅱ
60	古瀬戸灰釉陶	15前	瓶子	把手	6	黄白	淡緑		表探
61	古瀬戸灰釉陶	15後	御皿	底	4	黄白	淡緑	内部鉄釉生目	13号土壙
62	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	口縁	4.5	黄白	淡緑	内部施釉	1-せ-Ⅰ
63	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	口縁		黄白	淡緑	内部施釉	
64	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	口縁	4.5	黄白	淡緑	内部施釉	
65	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	胴		黄白	淡緑	内部施釉	6-さ-Ⅱ
66	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	口縁		黄白	淡緑	内部施釉	
67	古瀬戸灰釉陶	17前	茶碗	口縁		黄白	淡緑	内部施釉	に-7-Ⅳ
68	古瀬戸灰釉陶	16後	茶碗	胴底	5	黄白	淡緑	内部施釉	ふ-11-Ⅲ
69	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	口縁	4	灰白	淡緑		た-3-溝
70	鉄釉陶	18前	擂鉢	底	7	白灰	内褐	内部施釉	し-2-Ⅳ
71	古瀬戸灰釉陶	15前	平碗	胴下	6.5	白灰	緑		2-や-Ⅲ
72	天目陶	16前	皿	底削蔽	4	灰白	褐	(大窓)	と-22-1
73	鉄釉陶	18後	茶碗	胴	4		褐色	(大窓)	11号土壙
74	鉄釉陶	18後	碗	胴	4	灰白	褐		9-み-Ⅲ
75	鉄釉陶	18後	茶碗	口縁	4	灰白	斑黒褐		そ-4-Ⅲ
76	鉄釉陶	17前	茶碗	口縁	4	灰白	斑黒褐		か-3-Ⅲ
77	鉄釉陶	16前	茶碗	口縁	4	灰白	斑黒褐	(大窓)	
78	鉄釉陶	19前	茶碗	胴	3	灰白	斑黒褐		25-C-Ⅲ
79	鉄釉陶	18後	茶碗	胴	4	褐白	褐		5-30-Ⅲ
80	鉄釉陶	19前	茶碗	胴	2.5	灰白	褐	黒流水	12-6-Ⅲ
81	黒釉陶	17後	茶碗	底	4	灰白	黒		ふ-10-Ⅲ
82	黒釉陶	19前	壺	胴上	4	白灰	黒褐	ロクロ目	に-5-Ⅲ
83	黒釉陶	17後	壺	頸部	10	暗灰	黒灰	(地元産)	土壙4
84	黒釉陶	18後	茶碗	口縁	3	白灰	黒褐		9-18-Ⅱ
85	黒釉陶	18後	皿	口縁	4	白灰	黒青		さ-6-Ⅱ
86	黒釉陶	18後	茶碗	胴下	4	白灰	黒		す-3-Ⅱ
87	黒釉陶	18後	茶碗	胴	4	白灰	黒		こ-7-Ⅲ
88	黒釉陶	17後	茶碗	胴	4	白灰	黒		6-6-Ⅲ
89	黒釉陶	17後	茶碗	胴	4	白灰	黒		せ-2-2-1
90	黒釉陶	17前	茶碗	胴	4	白灰	黒		し-22-1
91	黒釉陶	17後	茶碗	口縁	4	白灰	黒		と-3-Ⅲ
92	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	胴	6	黄白	緑	(大窓)	に-5-3
93	瀬戸灰釉陶	17前	茶碗	底削蔽	6	黄白	緑		ふ-5-Ⅱ
94	緑釉陶	17後	茶碗	底削蔽	2	黄白	緑青		は-9-Ⅱ
95	青釉陶	17後	茶碗	口縁	3	黄白	淡青		み-9-Ⅲ
96	緑釉陶	18前	茶碗	高台	5	白青	淡緑		な-16-Ⅱ
97	黄釉陶	19前	茶碗	高台	6	白青	黄淡		表探
98	緑釉陶	19前	茶碗	高台	4	白青	淡緑		て-18-Ⅱ
99	陶	19前	皿	胴	6.5	黄白	黄白光		2-せ-1
100	緑釉陶	19前	茶碗	底	5.5		淡緑		に-19-と
101	灰釉陶	18後	茶碗		3	黄白	淡緑		む-6-Ⅲ
102	緑釉陶	18前	茶碗	胴	4	黄白	淡緑		な-16-Ⅱ
103	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	底(鉢)	5	灰	淡緑	(大窓)	と-2-Ⅲ
104	志野	17前	皿	口縁	4	灰白	白灰		さ-3-Ⅱ

番号	陶器名称	時代(世紀)	器形	部分名	mm厚	胎土色	釉色	文様等	出土位置
105	志野	17前	皿	口縁	4	灰白	白灰		さ-3-II
106	志野	17前	皿	胴	4	黄灰	淡黄		ほ-2-Ⅳ
107	志野	17前	皿	胴	4	黄灰	淡绿		す-4-Ⅳ
108	古瀬戸灰釉	16前	皿	胴	4	灰青	淡绿		る-12-Ⅲ
109	黄釉陶	18前	茶碗	口縁	3	白灰	淡绿		C-10-II
110	灰釉陶	19前	茶碗	口縁	3	灰淡	淡绿		2-2-II
111	青釉陶	19前	茶碗	胴	2	黄白	淡青		へ-9-II
112	瀬戸灰釉陶	16後	茶碗	口縁	3.5	白灰	淡黄		14-3-Ⅲ
113	黄釉陶	19前	茶碗	胴	4	黄白	淡黄		て-16-II
114	京焼風陶	19前	茶碗	口縁	4	黄白	淡黄		て-16-II
115	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3	黄白	淡黄		ほ-13
116	京焼風陶	17前	茶碗	口縁	4	黄白	淡黄		て-4
117	京焼風陶	19前	香炉	胴下	4	黄白	淡黄		そ-16-II
118	京焼風陶	17後	香炉	胴下	4	黄白	淡黄		せ-1-II
119	京焼風陶	17後	香炉	口縁	4.5	黄白	淡黄		な-16
120	京焼風陶	19前	香炉	胴	2	黄白	淡黄		3-9-Ⅲ
121	京焼風陶	18前	香炉	口縁	3	黄白	淡黄		か-7-II
122	京焼風陶	17後	香炉	口縁	3	黄白	淡黄		ゆ-3-Ⅲ
123	京焼風陶	17後	茶碗	口縁	4	灰白	淡绿		2-17-Ⅲ
124	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3	黄白	淡绿		す-6
125	古瀬戸灰釉陶	16前	平碗	胴	4	黄白	淡黄		け-1
126	京焼風陶	19前	茶碗	口縁	3	黄白	淡黄		へ-9-Ⅲ
127	京焼風陶	19前	茶碗	胴	2	黄白	淡黄		12-T-2
128	京焼風陶	19後	茶碗	胴	4	黄白	淡青		9-そ-Ⅱ
129	京焼風陶	19前	茶碗	胴	4	黄白	淡青		ち-6-表探
130	京焼風陶	18前	茶碗	胴	3	黄白	淡青		?
131	京焼風陶	18前	茶碗	胴	3	黄白	黄淡		ち-6表探
132	京焼風陶	18前	茶碗	胴	3	黄白	黄淡		へ-9表探
133	黄瀬戸	16後	茶碗	胴	3	青	青淡		と-17-Ⅲ
134	黄瀬戸	16後	鉢	底	13	淡黄	淡绿黄斑		12-3-Ⅲ
135	黄瀬戸	16後	茶碗	胴	2.5	淡黄	淡绿黄斑		表探
136	綠釉陶	17後	茶碗	胴	4	灰黑	淡绿		む-6-Ⅲ
137	京焼風陶	19前	茶碗	口縁	3	白	淡黄		む-6-Ⅲ
138	京焼風陶	19前	茶碗	敲	5	黄灰	淡黄		C-18-1
139	京焼風陶	19前	茶碗	胴下	4	淡黄	淡黄		へ-8-II
140	京焼風陶	19前	茶碗	敲	3	黄白	黄白		も-8-Ⅲ
141	京焼風陶	19前	茶碗	敲	2	黄白	黄白青		ヰ-12-Ⅲ
142	京焼風陶	19前	小皿	口	5	黄白	黄白青		
143	京焼風陶	19前	灯明皿油	口縁	3	黄白	黄白青		Tf-5-3-II
144	京焼風陶	18前	茶碗	胴	6	黄白	黄白青		ゆ-5-IV
145	京焼風陶	19前	茶碗	口縁	3	黄白	黄白青		13-は
146	古瀬戸灰釉陶	16前	茶碗	口縁	3.5	白灰	白灰		て-4-Ⅲ
147	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3.5	白灰	淡黄		ヰ-2-Ⅲ
148	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3	白灰	淡黄		ち-5-Ⅲ
149	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3.5	磁	淡黄		み-9-Ⅲ
150	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3	灰暗	淡黄		と-7-II
151	京焼風陶	18前	茶碗		3	白黄	黄白		も-9-表探
152	京焼風陶	19前	茶碗	胴	3	白黄	黄白		も-9-Ⅲ
153	黄釉染付陶	18前	皿	胴	4	白灰	淡黄	黒花文	へ-9-II
154	黄釉染付陶	18前	壺	底上	4	白灰	淡黄	ゴス黒花文	へ-9-Ⅲ
155	梅文染付陶	18前	平碗	底削敲	底削 底五六	灰黄	淡黄	貫入地見こみ梅	む-6-II
156	染付廣東陶	19前	湯呑	口縁	4	黄白	白淡	貫入花文	か-22-I
157	染付廣東陶	19前	茶碗	敲	4	白灰	青淡	草文	さ-9-II

番号	陶器名称	時代(世紀)	器形	部分名	mm厚	胎土色	釉色	文様等	出土位置
158	染付廣東陶	19前	碗	口縁	3.5	白灰	淡黄	花文	よ-9-II
159	染付廣東陶	19前	碗	底	4	白灰	淡黄	ゴス縁	ゆ-5-III
160	染付白釉陶	19前	茶碗	胴	5	黄白	白黄	光沢	む-6-III
161	白釉陶	19前	茶碗	底	5	黄白	白黄	光沢	そ-2-II
162	白釉陶	19前	茶碗	胴	5	青白	青白	ゴス草文	む-6-III
163	青磁様磁器	19後	茶碗	口縁	30	透明板青	白		さ-8-II
164	染付白陶	19前	猪口	底	4	黄白	白	ゴス花文	か-22-II
165	染付白陶磁器	19後	蓋	口縁	1.5	灰	褐色黒斑		2住-III
166	鉄釉陶	18後	鉢	底直径90	8	黄白	褐		た-16-II
167	鉄釉陶	18後	香炉	口縁	4	黄白	褐		ほ-6-III
168	鉄釉陶	18後	茶碗	口縁	4	黄白	褐		は-9-II
169	鉄釉陶	18後	鉢	胴	9	黄白	褐		け-5-I
170	鉄釉陶	19前	甕	底	6	灰	褐		表採
171	鉄釉陶	19前	碗	底直径45	4	灰	褐色青		も-9-III
172	鉄釉陶	19後	擂鉢	胴	6	褐淡	褐色		ゆ-3-III
173	鉄釉陶	18後	茶碗	胴	4	灰	褐		し-2-II
174	平目	17後	茶碗	口縁	5	淡灰	綠褐		22-C-I
175	鉄釉陶	17後	茶碗	胴	4	灰暗	褐		5-6表採
176	褐釉陶	18前	鉢	胴下	4	黄白	褐光		10T-に
177	褐釉陶	19前	擂鉢	胴下	9	黒灰	黒光		む-5-III
178	拳骨茶碗	18前	茶碗	底底径540	5	黄白	黒	松室文	さ-8-2
179	常滑焼	19前	鉢	胴	17	褐白黄	褐	分かけ	9-ひ-II
180	練瓦片	20後			2.0	褐	褐		24-9-II
181	白釉陶	19前	茶碗	口	4.5	黄白	白		さ-8-II
182	染付磁器	19後	小皿	口	2	白	白		な-6-II
183	染付磁器	19後	茶碗	胴	3	白	白	(青)	す-5-II
184	染付磁器	19後	茶碗	胴	3	白	白	(青)	2-9-III
185	染付磁器	20前	茶碗	口	2	白	白	(青)木文	と-22-I
186	染付磁器	20前	茶碗	口	2	白	白	青	表採
187	磁器	20前	小皿	高径	2	白	白	草文	な-8-II
188	磁器	20前	德利	底	7	白	ゴス		ほ-6-III
189	染付磁器	20前	碗	口縁	3	白	白	唐草文	ら-6表採
190	染付磁器	19前	?	口縁	2	白	白	青	つ-16-II
191	染付磁器	20前	小皿	胴	3	白	白	青	ち-9-III
192	白釉陶	19後	茶碗	底	4	白	白		そ-4-III
193	白釉陶	19前	筒形	胴	5	黄白	黄白		よ-11-III
194	白釉陶	20前	茶碗	口縁	2	白	白	青	て-9-III
195	染付磁器	20前	猪子	底	4.5	白	白	青ゴス縁	し-7-III
196	染付磁器	19前	猪子	口縁	4	黄白	黄白		さ-5-I
197	染付磁器	19前	茶碗	口縁	3	白	淡青	青ゴス	て-6-III
198	鉄釉染付陶	19前	茶碗	胴	3	黄白	青	青褐色	む-6-III
199	白釉磁器	20前	角皿	口縁	4	白	白	白	さ-3-III
200	青釉陶	19前	壺	胴	6	黄白	褐		さ-8-II
201	青釉磁	19前	茶碗	蓋	7	白	淡青	貢入	こ-2-III
202	研器	19前	急須	把手	径15	褐黑	褐黑		さ-6-II
203	灰釉陶	19後	茶碗	胴		黄白	黄白		な-10-II
204	灰釉陶	19前	角皿	蓋	3	黄白	黄白	布目	て-4
205	灰釉陶	19前	小壺	口縁	2	黄白	淡绿		と-3-III
206	铁釉陶	19後	伍皿	縁	6	黄白	褐	点打目布目	く-18-II
207	铁釉陶	19後	茶碗	胴	2	黄白	褐	褐色	け-5-I
208	铁釉陶	20前	急須	胴	2	黄白	褐		さ-8-II
209	染付磁器入道燒	19前	茶碗	胴	2	白	白	ゴス文	り-5-III

第2節 古代の遺構・遺物

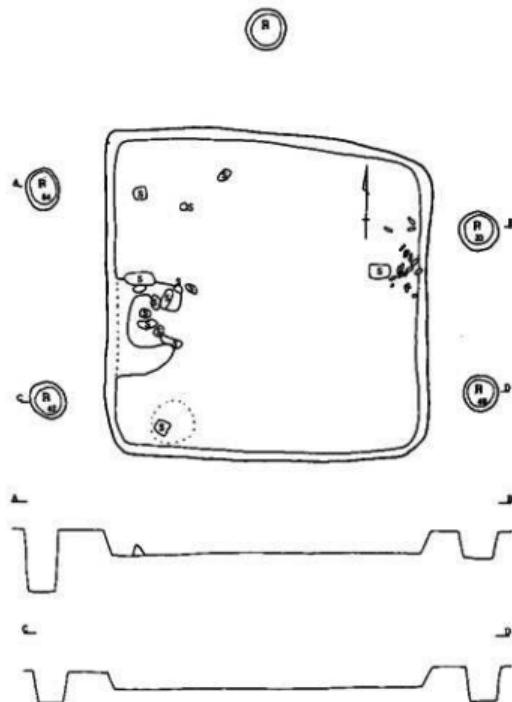
1 第1号竪穴式住居址と遺物 (第23.24.25.29図 図版4・7)

遺構 (第23.24図 図版4)

当住居址は、C区の南端36～38—そーちグリッドに確認されたものである。

北東壁がややくずれるが4.5m四方の方形プランである。ローム層を25～30cm掘り込んでつくられ、床面はほぼ平坦で固く堅緻である。主軸はN-90°-Eで真西を向いている。

カマドは、西壁やや南寄りにある。右側は袖部には石がみられるが、石を組んで造ったというような石心状ではなく、主には粘質ロームを用いている。左側にはまったく袖石がみられない。中央に支石が立った状態で検出されている。火床は床をわずかに掘りくぼめた程度である。



第23図 第1号竪穴式住居址実測図 (S = 1 : 80)

カマドの両袖は粘質ローム（a）で構築され、内部は上層に黒色土と灰層、焼土の混合土（b）からなり下層は焼土（c）である。

カマドの左南壁ぎわに焼土と灰の混合土の浅いピットがあり、内部より須恵器の杯（第25図-4）が出土している。

カマド内より土師器の壺（3）と須恵器の壺の破片と5の杯が、カマド以外ではカマドの右側から1、2の土師器の壺と生焼き状のため復元できなかった小形壺がつぶれた状態で出土している。

東壁ぎわ北寄り床面上より編物用錐石24点が集積状態で発見されている。

柱穴は内部ではなく外側に5個確認されているが、P1～P4が柱穴と考えられる。

遺物（第25.29図 図版7）

1、2、3は土師器の壺4、5、6は須恵器の杯である。

1は大形のもので口縁はく字を呈し、やや強く外反する。胴部は内湾ぎみにわずかに外反し胴下部は強く収束する。砂粒を含み黄褐色を呈している。口縁内外はヨコナデ、胴部外面はヘラ削りの後、縦位のハケ目状調整が施される。胴部内面は斜位のハケ状調整である。

2は口縁が強く外半し、上部はほぼ水平となる。胴部はゆるやかな球状を呈し底部に至る。砂粒を含んで白黄褐色に固く焼かれる。外面胴部と内面口縁部はカキ目、内面胴部はナデ調整である。

3は小形壺で胴上半部を欠く。外面はハケ状調整、内面はナデ調整が施される。底は木ノ葉底である。

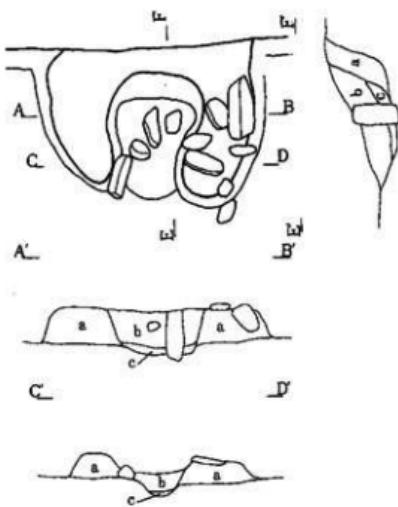
4は口唇を一部欠く杯である。体部は直線上に外反し、口唇はやや強く反る。砂を多量に含み青灰色及び白灰色を呈し、生焼状である。内外面ともロクロ痕を明瞭に残す。底は回転糸切りによって切り離される。色調は白灰色を呈す。

5は口縁を欠く破片である。胎土は緻密であるがややぶ厚い。ロクロヨコナデ調整、底は回転糸切り手法によって切り離される。色調は白灰色を呈す。

6は4同様生焼状のもので半分しかない。体部は直線状に外半する。ロクロヨコナデ、底は回転糸切りによって切り離される。胎土には砂を含む。

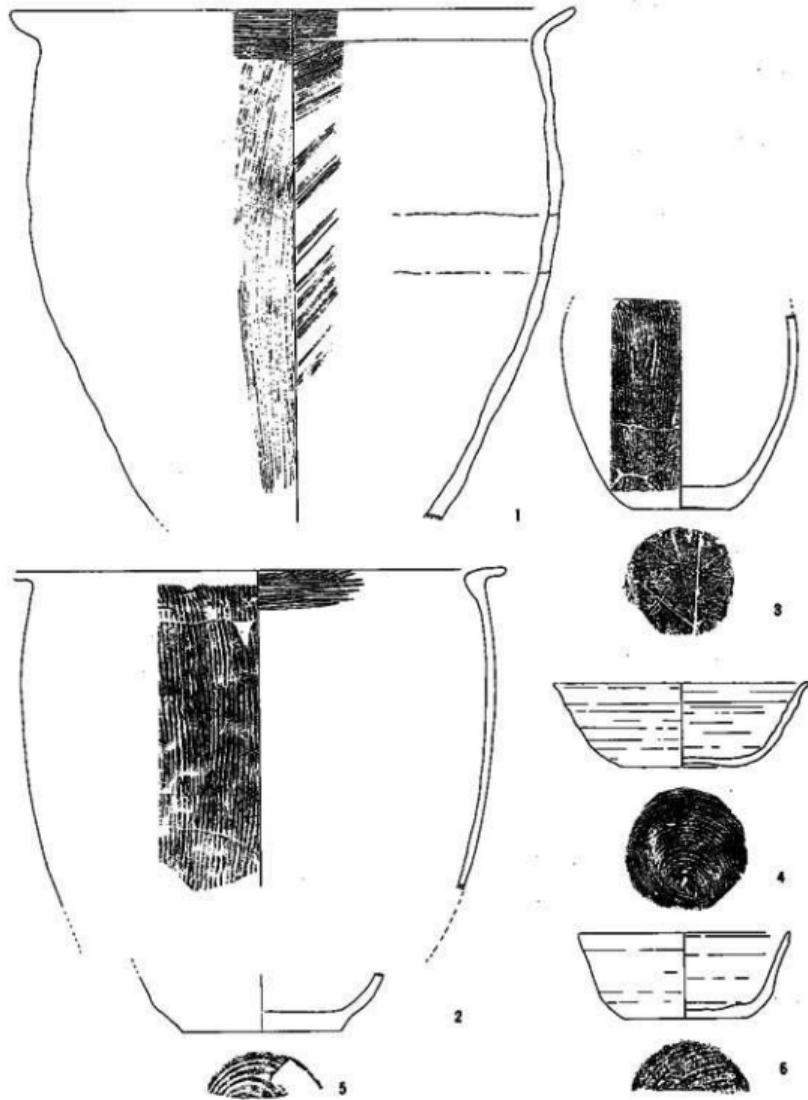
他は須恵器の壺の胴部破片と土師器の壺である。灰釉陶器は出土していない。時期は奈良時代終末か平安時代最初頭と思われる。

編物用錐石については後述する。



第24図 第1号竖穴式住居址カマド実測図

(S = 1 : 40)



第25圖 第1号堅穴式住居址出土遺物 ($S = 1/3$)

2 第2号竪穴式住居址と遺物

(第26.27.28.29図 図版5・7)

遺構 (第26.27図 図版5)

当住居址はC区の北東部25~28-
こへすグリットに位置している。

プランは東、西壁がわずかに張る
が、東西6.1m、南北6.4mを測る方
形である。主軸N=80°-E。

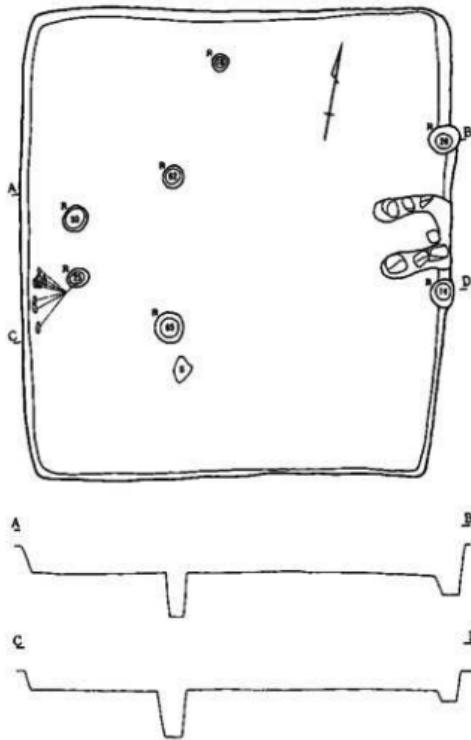
壁は直に近く、北側は40cm前後、
南側では30cm前後の壁高を測る。

ロームの床面は、東側がやや下が
るが、堅くタタキしめられている。

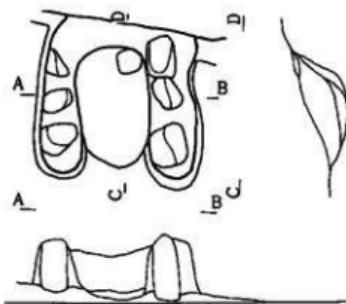
カマドは東壁中央にあり、両袖に
3個ずつの石を使用した石心造りで
ある。石を粘質ロームで固めている。
火床部は梢円形にわずかに掘りくぼ
められ、天井部は遺存してなかった。
内部は2層にわかれ、上層はローム
混じりの灰と焼土の混合土で、下層
は焼土が10cmほど堆積している。

柱穴はP1~P6の6本が確認され、
主柱穴はP1~P4の4本と考えられ
る。全体に内側に寄っており、P1、
P2は入口の施設のものと考えたい。
P5の北側には焼土と灰の混合土のつ
まつた浅いピットがあり、攝物用錐
石6個が出土している。同錐石はそ
のすぐ西の壁ぎわ床面上より、7点
が並んで出土している。第1号住居
址同様入口部右側に集積されており、
注目される。

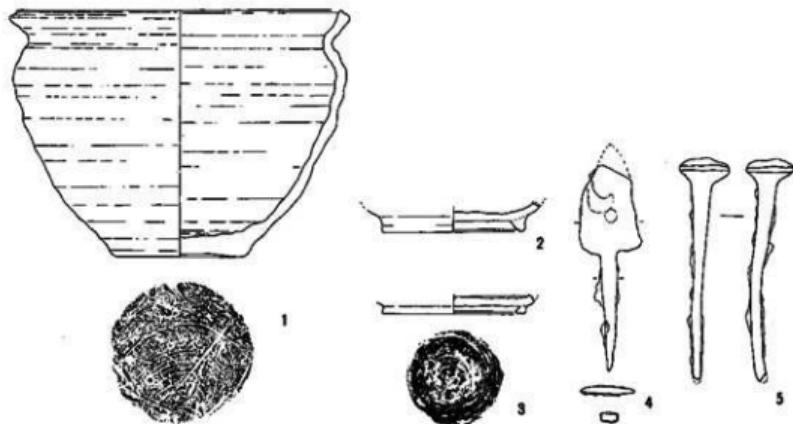
遺物は少ない。1の須恵器の小形
甕はカマドの手前より出土している。
第28図以外では、土器類(1個体)
の胴部と須恵器高台付杯の破片だけ
で、灰釉陶器は出土していない。覆



第26図 第2号竪穴式住居址実測図 (S = 1 : 80)



第27図 第2号竪穴住居址カマド実測図
(S = 1 : 40)



第28図 第2号堅穴式住居址出土遺物 (S=1/3)

土中より、4の鉄鎌、5の角釘が出土している。

遺物 (第28図 図版7)

1は須恵器の小形鉢である。内湾ぎみに外反する胴部は胴上部にて最大径を持ち、頭部はく字を呈し、口唇上面には稜をもつ。砂を多く含み、黒青色を呈す。外面とも幅広なロクロ痕をもつ。底は回転糸切りによって切り離された後、ヘラによる沈刻が施される。窯印であろうか。

2、3は須恵器の高台付杯で付け高台である。胎土は共に緻密である。3は明瞭な回転ヘラ削り痕がみられる。

土師器の甕はカキ目を持つものである。時期は奈良時代後半から平安時代初頭と思われる。

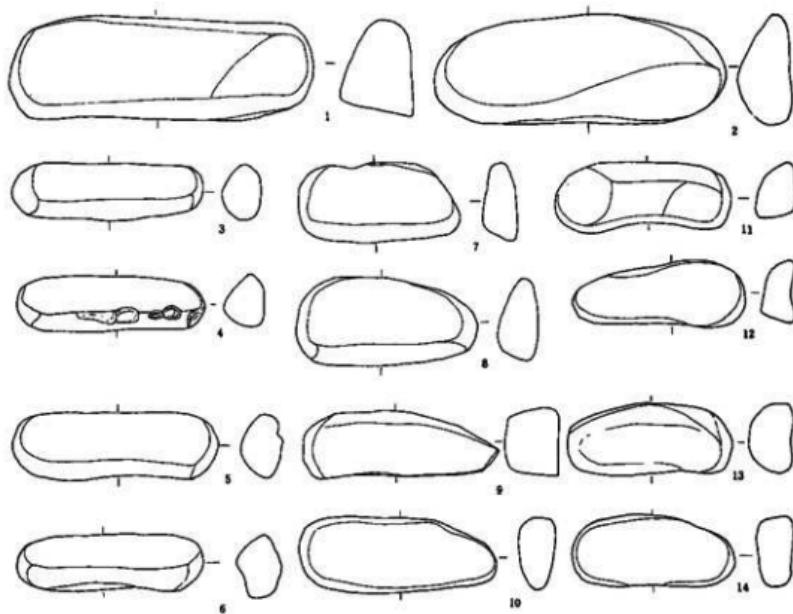
4は平根の鉄鎌である。腐食がはなはだしく先端部を欠いている。全長推定12cm、幅3.2cmを測る。

5は鉄製の角釘で、湾曲している。全長11cm、基部近くは1cm角、端部5cm角である。

3 編物用錐石 (第29図 図版8)

前述の両住居址内から集積状態で出土した当石器について一括して述べたい。第1号堅穴式住居の東壁の1部に24個が集積され、第2号堅穴式住居では西壁直下に7個、東接の床面下ピット内から6個計13個が出土した。その法量、形態については一覧表に示したので参照されたい。計37点の丸棒上石錐は天竜川河床でローリングされた自然礫を採集したと思われるが、形態的には一貫したスタイルを示しており、よく選択されている。従ってサイズとスタイルにより分類することができる。

サイズによる分類。石器の法量測定により、大、中、小に分類した。



第29図 編物用鎌石実測図 ($S = 1/3$)
 (1-L1形 2-L3形 3~6-M1形 7~10-M2形 11~14-S3形)

L サイズ、長さ、15cmから19cm。幅6cm。厚さ6cm～5cm。重量400g以上。

M サイズ、長さ、13cm内外。幅4～5cm。厚さ3cm内外。重量200g～300g内外。

S サイズ、長さ、10cm内外。幅2.5cm内外。厚さ2cm内外。重量120g～50g

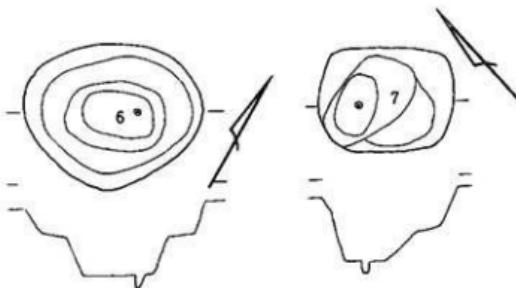
形態による分類

石器の片主面を上にして中軸線を横長に置いた場合の上面になる主面の平面形、特に上側線と下側線の差異により分類する。

- 1形 上側線と下側線の線が、互いにほど平行するもの。
 - 2形 上側線が上方に向かって、ゆるい弧状に張り出し、下側線の線がほど水平になるもの。
 - 3形 上側線が上方に向かって、ゆるい弧状を描き、下側線の線もこれにほど平行し内湾するもの。
- 第1号址出土は、M2形1点を除き、他の22個はS形で一括され、第2号址では、L形3点。M形3点。S形7点であった。この形の礎は当地域で、昭和初年代まで「コモデ石」とよばれ使用された。

編物用石錘要目一覽表

29國No.1	住居址No.	型体分類	法量				石質
			長 mm	巾 mm	厚 mm	重量 g	
12	I - 1	S 3	92	27	23	75	石英紛岩
	I - 2	S 1	85	34	26	120	輝綠岩
	I - 3	S 3	80	33	24	80	礫岩
3	I - 4	S 1	100	27	21	100	硬砂岩
4	I - 5	S 1	100	27	21	100	砂岩
7	I - 6	S 1	88	40	25	130	石英紛岩
	I - 7	S 3	111	39	25	155	硬砂岩
	I - 8	S 3	116	32	22	160	輝綠岩
5	I - 9	S 1	109	33	21	120	硬砂岩
	I - 10	S 3	95	34	17	100	硬砂岩
	I - 11	S 2	95	36	24	105	硬砂岩
	I - 12	S 3	95	22	17	50	綠泥岩
13	I - 13	S 3	86	36	20	100	硅質砂岩
14	I - 14	S 3	86	38	23	100	細粒花崗岩
	I - 15	S 3	105	32	24	155	硬砂岩
	I - 16	S 3	96	32	18	169	輝綠岩
	I - 17	S 3	98	32	20	85	硬砂岩
	I - 18	S 2	86	42	18	100	綠泥岩
9	I - 19	S 2	103	32	28	180	綠泥岩
7	I - 20	S 2	99	43	20	150	石英紛岩
	I - 21	S 2	95	45	21	100	輝綠岩
10	I - 22	S 2	103	40	19	100	砂岩
	I - 23	S 2	98	32	21	100	輝綠岩
	I - 24	M 2	124	32	27	140	砂岩
1	II - 1	L 2	165	65	45	640	輝綠岩
2	II - 2	L 1	160	52	36	520	硬砂岩
	II - 3	L 2	152	56	38	450	硬砂岩
	II - 4	L 2	190	60	37	500	片磨岩
	II - 5	M 2	137	37	36	300	綠泥片岩
	II - 6	M 3	112	58	23	150	石英紛岩
	II - 7	S 2	87	46	25	110	輝綠岩
	II - 8	S 2	72	35	25	50	硬砂岩
	II - 9	S 2	84	35	17	55	鑿石片岩
	II - 10	S 2	79	27	30	75	片磨岩
	II - 11	S 3	93	40	20	100	硬砂岩
11	II - 12	S 3	92	32	20	100	輝綠岩
6	II - 13	S 1	97	25	25	120	硬砂岩



第30図 縄文時代土壤実測図 ($S = 1 : 80$)

第3節 原始時代の遺構・遺物

1 土壙 (第30図 図版)

発掘区約3,800m²の範囲内に、縄文時代・弥生時代の遺物が散布状態で出土したが、遺構として、検出されたのは、A区から両端の稜線状に近接して存在した土壙2基であった。

1)は、第6号址で長楕円形で長径東西2.5m、深さ1mを測り、周壁は中位に40cm幅の段が設けられ、底径1m内外で中央に径15cm内外の小ピットが設けられている。床面は礫質ローム層である。遺物は、縄文土器の微片および礫数個が出土したのみである。位置はg r 5-てと。

2)は、第7号址で、第6号址の北、g r 2-てに位置する。1辺1.9mの隅丸長方形を呈し深さ1.2mを測る。第6号址と同じく段築で底径60cmの床面に1個の小ピットがある。遺物は、縄文土器微片のみで、確たるもののは認められなかった。

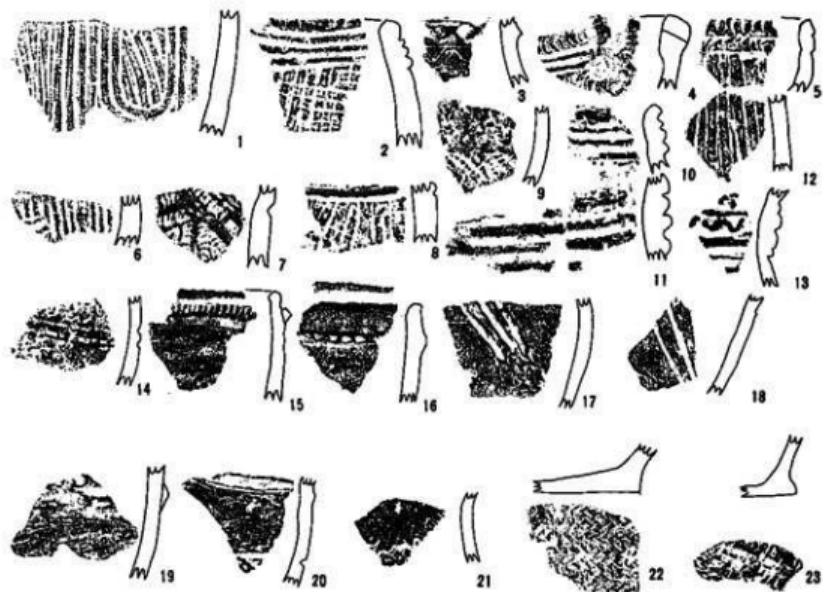
両土壙とも、段築の深い土壙で、底部のピットは逆抗の跡と見られ、動物捕獲の落し穴と考えられる。

2 土器 (第31図)

発掘区から出土した、縄文土器はすべて破片で総計122片であり、微片の弥生式後期土器3片であった。縄文土器は、中期に属するもの114片（初頭期20片、中葉期13片、後葉期13片）・後期前葉のもの8片であった。出土状態は発掘区全面の第III層内に包含され、組織的な包含状態は認められなかった。以下その代表的なものを第31図に示して紹介する。

1～6、8は、縄文時代中期初頭の集合沈線文系土器で、すべて深鉢形土器の断欠品である。梨久保式系または平出三A系土器の古式に属するものと思われる。出土数は他の時期に比較してもっとも多い。

7、9、10～12は、縄文中期中葉の新道期および藤内期の深鉢形土器片である。



第31図 出出土器拓影図 ($S = 1/3$)

13は、中期後葉の曾利期比定の土器であるが、比較的その数は少なかった。

14、16、17、18、19、20は縄文後期の掘の内式期土器の深鉢形土器の破片で、15は精製土器口縁部である。

15は、加曾利Bに属する粗製土器のひとつである。中沢台地のうちでは初出の土器群である。

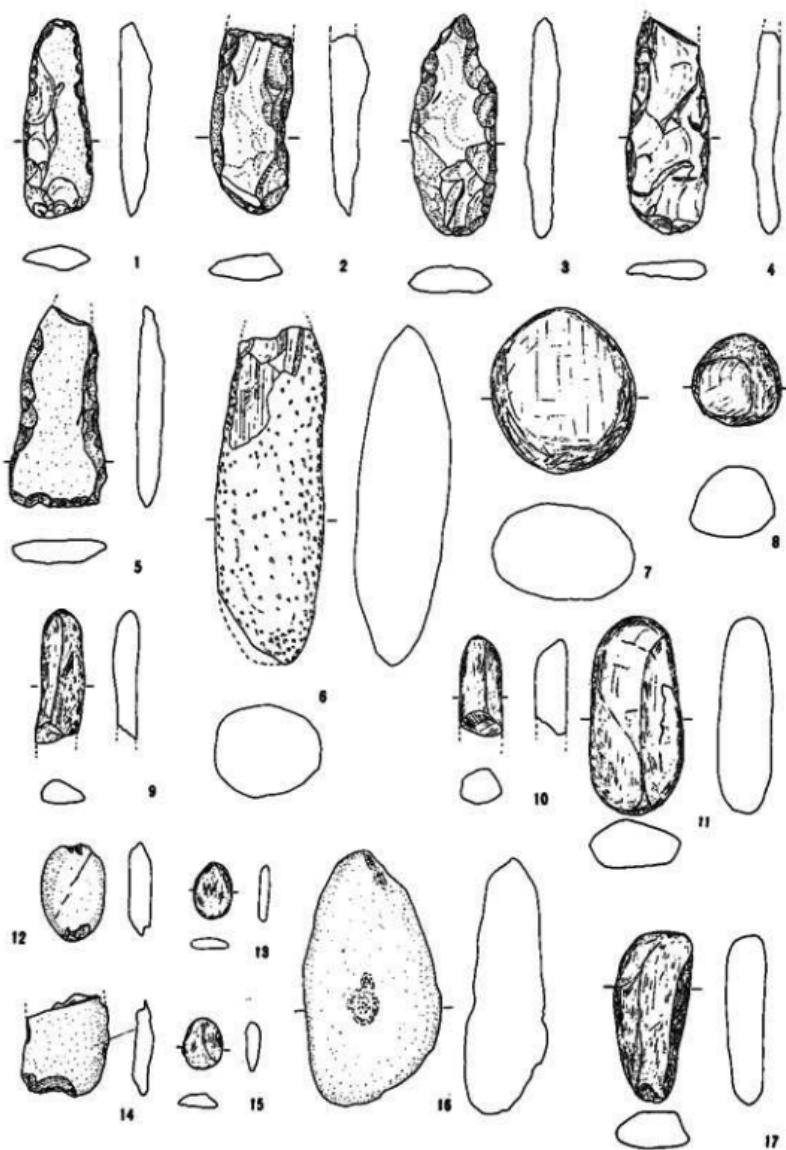
22、23は後期深鉢形土器の底部圧痕であり、関東系網代底である。

21は、弥生時代後期の座光寺原式に属する菱形土器の頸部破片で横走する櫛描き波状沈線文は小刻みで、器厚6mmである。当地点近くに集落の存在を示している。

第33図22に示した土製耳栓は、断欠品であるが、直径41mm、厚さ14mmの滑車形を呈し、正面径に対して、裏面径は32mmでやゝ小さい。正面、裏面ともに黒褐色を呈し、よく調整し磨かれている。全体に風化が甚しい。胎土に長石が混入されていて焼成中位である。前述の出土土器中、縄文後期の土器群に属するものである。g r 12-す出土。

3 石器 (第32、33図)

石器は、発掘区の全面の第II層および第III層内に包含され、計78点加えて断片130点出土したが、出土状態に組織的な傾向は認められなかった。いわば、散布地としての性格を示している。



第32図 出土石器実測図 (S = 1/3)

器種別に分類すると、石斧はすべて粗雑な打製品で、計33点。石質は硬砂岩・緑泥片岩・綠色岩で占められ、内断欠部分が11点も認められ、他のすべても破損箇所が認められる。横刃は計11点、硬砂岩の礫を打ちはがした自然面を残すものが大部分で、すべて硬砂岩製である。石錐は硬砂岩製3点、磨石は10点で球状のものも4点、梢円上のもの6点である。棒状敲石は3点、大形の砥石4点、敲打器3点、石礫4点である。

その代表的なものを第32、33図に掲げたので参照されたい。

1) 石斧 (第32図-1~6)

硬砂岩または緑泥片岩を原材とした打製の石斧である。長さ10cm、幅3cm、厚さ2cm内外の両側縁がほぼ平行する短冊か、やや裾広がりの器形で一部に自然面を残し、打削により整形されており、縄文時代中期に盛行する石斧である。

刃形は、円刃(2、3、4)偏刃(1)直刃(5)である。刃先の断面形は、片刃に近いものは(3)を除いてすべてで弱凸強凹片刃に近く刃線が柄に直交する形で固着された横刃であろう。ただし、調製が粗雑であり、やゝ小形であるため、鍬のような土掘き、土掘の機能を果たした石器と思われる。

6は、円錐状敲製石斧で緑泥片岩製の長さ20cm、太さ長径5.5cm、短径5cmを測る。全面を打調した敲製であり、從来、遠州型棒状磨製石斧とよばれた特徴ある石器である。始刃、円刃で縦刃として伐採に使用されたと思われる。土壙第13号址堆土中出土。

2) 磨石 (第32図 7、8)

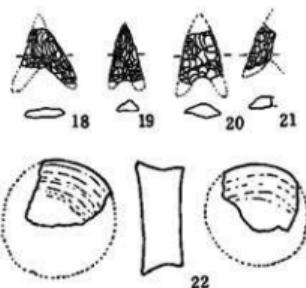
7、8は扁球状磨石である。7は長径7.5cmの大形品で、花崗岩製、8は径5cmの小形品で緑泥片岩製である。全面がよく研磨されており、使用による磨痕と思われる。磨石1類。11、17は棒状磨石で11は礫砂岩の河床礫を利用した、長さ12cm、幅2.6cmを測り、全面がよく磨洞されて滑らかである。17は綠色片岩河床礫で長さ6cm、幅4cmを測る断面台形に近い、全面が平滑に研磨されている。13、15は極めて小形の盤状磨石で、よく研磨されている。

3) 敲石 (第32図 9、10)

9、10ともに小形棒状敲石の断欠品で推定全長9cm内外のものと思われる。共に粘板岩製、全面をよく研磨してあり、頂部突端に小さな打痕が認められる。石礫等の作成用工具と思われる。

4) 石錐 (第32図 12、14)

共に、硬砂岩の川床礫の扁平な円礫を選び、長軸の両端を打欠いて凹部をつくり、縄掛け用としてある。共に硬砂岩製で、12は長さ5.5cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmを測る定型品であり、14は上部が欠失している。漁網のおもりとして使用された。



第33図 出土石礫、土製耳栓実測図

(S=1/3)

5) 凹石（第32図16）

長径13.5cm、厚さ4cm、内外の長楕円状の花崗岩の平石の中央部に径1.5cm内外の円形の凹みを2個作出し、裏面にも2孔がある。くるみ割り用台石と思われる。

6) 石賺（第33図 18, 19, 20, 21）

黒耀石製4点が出土した。小剥片を打調して、小形の2等辺三角形を作り全面を細部加工した「矢じり」である。三角形の高さ2.5cm内外、底辺の長さ2cm内外、厚さ2.5cm内外の小形石器で、底辺に抉りこみを作出している。高見原遺跡では縄文中期住居址群に伴って出土しており、器形分類が行われている。これによれば、18, 21は抉りこみがシャープなV字形をもち、C2類に属し、19, 20は凹字状を呈し、C3類に属する。縄文中期または後期の所産であろう。弓矢の使用による狩猟生活をもの語る石器である。

4 土製耳栓

第33図22に示した土製耳栓1点が造構外（g r 12-す）の第II層から出土している。

径41mmの円形で、厚さ14mmを測る太鼓形を呈し、裏面は径が小さく34mmである。側面形は、中軸線が全周やゝ細くなりいわゆる滑車形耳栓である。色調は黒褐色を呈し、胎土に石英末が混入されている。全面ナデ調製が加えられて平滑であるが、施文は認められない。前述の出土土器中、後期全葉の時期に所属するものであろう。

第V章 総 括

第1節 まとめ

中沢台地の西端、天竜川に臨む第2段丘面突端に所在する古城南遺跡の記録保存のための発掘調査について、その詳細を、前述のように記録してきたが、これを要約すると次のような。

1. 遺跡所在地 長野県駒ヶ根市大字中沢字西原2901～2960約6,000m²番地
2. 発掘調査事業の主体 駒ヶ根市教育委員会 (駒ヶ根市発掘調査会の編成した調査団)
3. 発掘面積 3800m²
4. 発掘調査の成果

(1) 遺構

- イ、原始 縄文時代中期の土壙 2基
- ロ、古代 奈良時代末葉の竪穴式住居址 2軒
- ハ、中世 室町時代末葉の掘立柱式建物 4棟・柱列址 4基。土壙 4基
- ニ、近世 江戸時代前期の掘立柱式建物 5棟・柱列址 5基。土壙 5基 (時期不明のもの)

同期の溝 5基

(2) 遺物

- イ、原始 縄文時代中期及後期の土器破片114点。石器78点。
- ロ、古代 須恵器、9個体。土師器7個体。鉄鎌1点。石鍤37点。鉄釘1点。
- ハ、中世 陶磁器、土器破片56点。砥石1点。古錢3枚。鉄釘1点。
- ニ、近世 陶磁器破片140点。他に近代磁器14片。

以上であるが、地名的にも、伝承的にも、過去の人間生活の痕跡の追求にとって何の手がかりもないこの西原地籍を発掘調査した結果、前述のように、およそ4,000年前の縄文時代から近世中頃に至るまで過去3回にわたる先人の生活の痕跡を検出し得たのは、誠に幸いのことである。特に中世から近世に至る遺構、遺物は、現在数多く行われている各地の発掘調査例に照らしても稀有のことであり、今後の中世末、近世初頭の社会・経済の研究にとって重要な資料を提供することであろう。今後の古城南遺跡の考古学的、歴史学的研究に、記録保存された報告書や写真実測図等市立博物館収蔵の遺物の、学術的、教育的活用を十分に実施されるよう願ってやまない次第である。そのためにも、発掘や遺物の調査に当たった数箇月間に得た所見の若干を次に記しておきたい。

第2節 所 見

1. 縄文時代遺構等について

縄文時代遺跡は、発掘前の予想に反して、土壙2基と全面の第Ⅲ層に散布状態で含含された中

期の土器や石器等で、単なる遺物散布地であった。中沢台地は「歴史的環境」で前述したように、中期大集落址がいくつか存在している。それにもかかわらず、天竜川最前線に位置するこの遺跡は微々たる内容であった。しかし遺物出土状況からみると、縄文人たちが、台地の中で最も広大でしかも天竜川べりのこの地をよく利用していたと思われる。石錐に見られる漁撈生産性、磨石に見られる石器作成、豊富な打製石斧に窺うことができる植物の採集、あるいはそれは、焼畑耕作で積極的な生産活動であったかも知れない。このような生きるために生産活動がさかんに行われていた土地であった。動物捕獲用の土壙は集落の周辺に造られる例が多いので、この近くに集落の存在を予想することができる。幸い、発掘地点東北約200mの2977番地付近には、湧水もあり、遺物の出土も多い。「古城東遺跡」と称したい。土地改良事業からわずかに免れた地域であるので、今後市の積極的な保護行政を加えることをお願いしたい。特に本遺跡には、縄文時代後期前半の土器が出土している。後期遺跡は、当伊那谷地域には極めて少なく貴重である。北方の東伊那地籍には、高烏谷山麓火山地籍に、青木北遺跡に縄文後期の大環状配石址が発見されている。しかも、周辺に住居址群は発見されず、この時代の竜東地域の後期集落の人々が集まって営んだ祭祀遺構とされる。この社会構造の発見は今後の重大な課題だからである。

2. 古代堅穴式住居址群について

C区の南端部に検出された住居址群は、両者ともに奈良時代最末期に営まれた建物で「万葉集」の貧窮問答歌に詠われている伏廬（ふせいほ）、つまり堅穴式の住居である。その規模は、現行尺度でいえば第1号住居址は、堅穴は一辺5m弱の方形に掘り凹めた平らな床面を持ち、西壁の中央南よりに石芯粘土製のカマドが造りかけられている。外側の東西に太い主柱4本が立てられ、南北に各1本が立てられているから恐らく棟持柱に棟を支えられた南北棟方向の切妻造りの屋根と思われる。軒先の屋根裏の生活空間は、壁上面を加えると11.5坪と広くなる。腐植を免れ、残された什器類は、須恵器壺1個、同杯3個（蓋2点）、土師器壺3個、土師器内黒杯1個、焼成前の土師器小形壺1個等はカマドの周辺群集し、東壁に近く土須壺1個と東壁中央に添って、編物用錐石23個が集積状態で出土し、調理と作業の場の分離を示していた。

第2号住居址も方形プランの南北5.3m、東西6.3mの規模を持つ堅穴式である。

主柱四柱穴は、東に偏して位置し、東壁の石芯粘土製カマドを守るかのような屋根構造を思わせた。遺物は、須恵器の鉢1個、杯2個、土須壺1個、平根鉄鎌1個、鍛造鉄釘1個である。

更に西壁から第1号址と同じように編物用錐石17個が出土した。

同様な列は、伊那市福島遺跡第7号住居址等にもみられた。

共に屋根構造は、切妻造りで、妻側に庇を入れた形状と推定される。棟方向は第1号址は南北棟、第2号址は東西棟であろう。立地から見て段丘南崖下の湿地を耕作した農民の家と思われる。

共に、8世紀終末期に属する住居址で、この時期の住居址としては、中央道建設時に調査された笑輪町中道遺跡第60号住居址、同24号住居址、諫訪市十二后第35号住居址等の時期に平行する時点と考えられ、当市内においては、赤穂上赤須の中通り下遺跡第24号、第25号址と同時期であり、竜東地区においてはその存在は初見である。昭和59年度発掘された小山遺跡の堅穴式住居址群は、10世紀前半期のもので、灰釉陶器が主体であったが、当遺跡には灰釉陶器は見あたらずこ

れに先行する時期をもの語り、中沢台地の古代農業開発が下間川河口に始まって漸次上流に遷つたことを証明し歴史的に貴重な遺構であった。

3. 中世および近世の遺構について

(1) 据立柱式建物址・柱列址・土壤

発掘当初は、これら無数の柱穴群は、中世末期の居館址と思われたが、精査の結果、中世末から近世前期に至る遺構として把握されるに至った。

据立柱式建物は9棟がA区、B区、D区2,000m²に展開していたが、平地式据立柱建物で梁桁一間を基準とする梁桁二間～四間の建物が多く、平面プラン矩形を呈する粗末な建物である。

構造は、総柱式様の第2号址を除いて全て側柱式であり、柱間は不定で1.8m、2.2m、3m等で統一性に乏しい。

ピット（柱痕）の掘り方は、すべて坪掘で平均径25cm深さ30cm内外の平面形は円形、梢円形のみで簡素である。上屋構造を考える積極的な遺物はないが、平地式の側柱の上に丸木組みの桁と梁を組み、平屋切妻作りの草葺き屋根が想定される。壁体は草葺き程度であろう。ただし第4号址、第8号址などの長屋風のものは壁体がなかったと思われる。

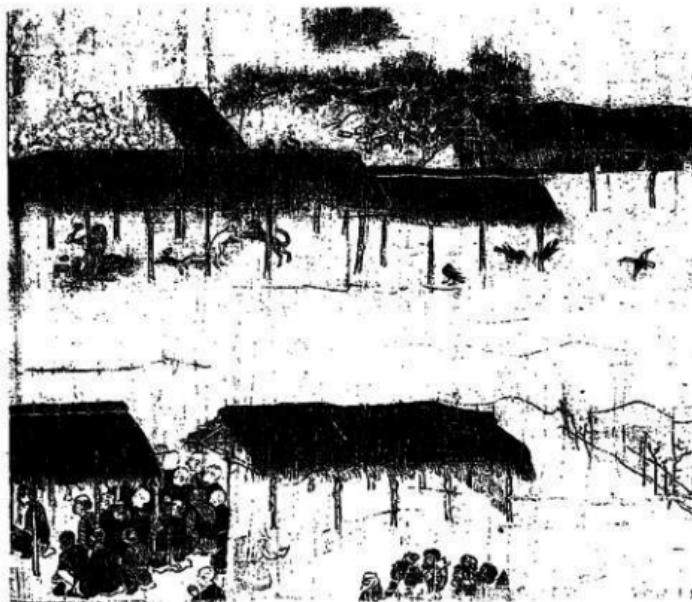
柱列址は9列が、据立柱式建物址群の近くに位置しており、建物址の大部分が據方向を南北地方向を向くのに対して各柱列址は縦じてほぼ東西方向に直列して、建物に対して直角に対応している。また柱間は、4.8m、3.0m、2.2m等の組み合わせで極めて不定、柱の太さも隔差が認められる。

土壤は、建物群の範囲の中に13基が検出されたが、小形方形竪穴状のものは第1号址、第2号址、第7号址、第13号址で他は梢円形でやや浅く、断面皿形を呈するものと、深く断面桶状を呈するものがある。方形竪穴状を呈するものは第1号址のよう宗教的な要素を持つものと第2号址のように生活的要素の濃いものがあり、後者の平面梢円、断面桶形を呈するもの第3号址、第8～第12号址等は貯蔵または埋棄の性格が強い。恐らく建物に付属した施設で炊飯、食糧保存に關係する機能を果たしていたとみられる。

溝址は、後世18世紀以後のものと思われその性格は不明である。

以上の遺構敷地内から210片にのぼる陶磁器が主として第II・III層より出土し、遺構に共伴する遺物と認められ精査の結果、17世紀から18世紀に至るもののが約50%、15世紀、16世紀のもの約30%を占めていることが判明した。中でも中国製明代の青磁碗、古瀬戸灰釉瓶子等は室町時代後期末の優品であり、黄瀬戸皿、辻が花文様が描かれた古織部向付皿、古志野碗等は桃山、慶長期の逸品であって、本遺跡の生活文化の飛躍的高さを証明しているのである。

建物の簡素、粗末な様相に対して、共伴陶磁器の質の高さは余りにも異相といわざるを得ない。前述の建物・柱列等の配置、構造等を総合してみると、中世に描かれた「一遍上人絵伝」の一場面が参考になる（第34図）。この觀喜光寺藏本といわれる伝世の絵は、信州佐久郡都野市の添書があり13世紀における現佐久市野沢付近に所在した市場の建物の状態をよく表現している。遊行の聖僧一遍が、廃屋になった市場の建物の中で信者に布教する風景である。問題は、その茅屋、1間×2間、または4間から5間の長屋風の据立柱式建物数棟が立ち並んでいる。その柱間は不定、



第34図 信州伴野市場図（一遍聖人絵伝 所収）

柱は自然木の丸太で整体ではなく吹き抜け様、屋根は切妻の草葺き屋根で軒先は低い。市場の店舗、または倉庫なのである。ただ最後方左手に見える大屋根は住宅であろうか。

この風景は、前述の本遺跡の掘立柱式建物群の状態そのままである。ただし本建物址群は一時的な存在でなく、中世末から近世初頭まで各時期ごとに存在し、断続しながら続いたと思われる。

掘立柱式建物と柱列址とを時期別に見ると15世紀代は建物第7号址と柱列第1、第2、第7、第8号址、16世紀代は、建物址第2、第3、第4号址と柱列址第3、第5号址、17世紀代は建物第1、第5、第6、第8、第9号址、柱列址第4、第6、第9号址という組み合わせになり、建物は17世紀で終わり、18世紀以降は構址のみである。

以上のことから、本造構は、中世後末の時期から近世初頭まで維続した市場的施設の遺構と見做ざるを得ない。もちろんその全容ではなく市場の中心部の一角が露呈された状態である。遺物は主としてA区の北側、西側に多く採集されているのも一証差である。

この市場成立の原因は何であろうか。ひとつは、中世末における菅沼氏の隆盛である。菅沼氏は、諏訪神社関係の「守屋文書」によれば「守矢満実書留」中に、文明14年の神使御頭を勤司し、内県介官付、中沢菅沼有貞と記録され、中沢郷を代表して諏訪神社上記最大の祭事御頭祭を執行していることが証明される。神使御頭は、諏訪神系の親族でなければならず、その庶子中沢氏の一族として15世紀末には中沢郷支配権を掌握していたと見られ、神使御頭役は莫大な私財消費を

伴うことからみてその財、権力とも大きかったと思われる。普沼氏居城は、本遺跡東南方200mの段丘突角上に方形本郭と副郭が存在し、堅固な連郭式城郭が現存し、その崖麓に町屋地割を今に遺存して15世紀代の盛ぶりを窺うことができるがその財政獲得とこの市場が関係しよう。

つぎのひとつに本遺跡のある周辺の地名に「ナギハバ」「シンガシ」の地名が存在することである。遺跡の乗る西原段丘面の西下段丘面は「ナギハバ」と通称されるが、対岸赤穂地区福沢氏文書、赤須氏譲状によれば領地境基準点「なぎはば」で、中世以来の呼称であること、「シンガシ」は現行「新川岸」と表記されているが「カシ」一河岸は港の意である。「シン」は新しいという意味でなく、新宮川の河口付近に設けられた港—新宮河岸の意である。この新宮河の中流の曾倉大津戸に、18世紀末の造営建造物として、国から重要文化財として指定された「旧竹村家住宅」が位置していた。

竹村家の慣習と伝承によれば、江戸時代前期から中期にかけて、当家は、高遠藩荷物宰領を世襲し、遺産相続の儀式には、木製の舟の樋の伝授が行われたといふ。東海地方から天竜川を遡上して運ばれる海産物はこの新川岸で荷おろして、新山峠越えで、高遠城まで駄馬で輸送する役目を執行していた。ここで江戸初期における新宮川港の繁栄を偲ぶことができるが、本遺跡西側直下の沖積面に「フナト」(舟泊)の地名があり港の位置が確定されよう。天竜川通船は、慶長13年(1608)、豪商角倉了以によって企画されたといふからこれ以前から近距離通船は行われていたと推定でき、寛永13年伊勢國太兵衛が鵜飼舟で殿島まで遡上したことも記録されているから、この新宮河岸は、十七世紀前半頃までは天竜川最上流の港であったと察せられる。従って市場の開設者は15世紀代の普沼氏の経営と考えられる。宋銭出土もこれを証明している。

以上、過去無人の地と思われていた本遺跡を発掘調査した所見を誌したが、大きく三時代にわたりて先人の生活が存在したことが判明し、人間の営みの力強さ、歴史の神秘さを痛感した。

終わりに当たり出土陶器については懇切なご教示を賜った愛知県瀬戸市立歴史民俗資料館藤沢良祐氏、本遺跡保存のための協議、予算補助について御配意頂いた県文化課埋文係の方々、市教育委員会、市立博物館の職員方、炎熱の2ヶ月を発掘に従事された調査員ならびに作業員の方々に、篤く謝意を表すると共に、記録保存された当文化財の今後における活用を願ってやまない次第である。

(調査団長 林 茂樹)



図版1 遺跡遠景

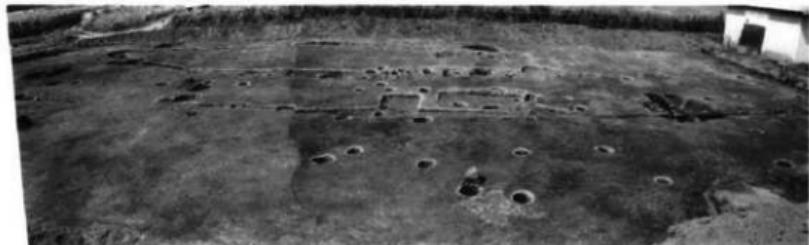
(上段西より)
(中段南より)
(下段東より)



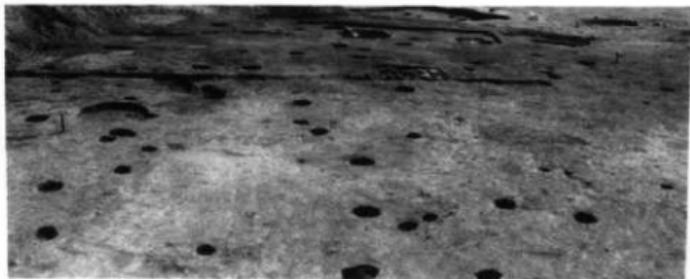
東より



西より



第A区遺構遠影(南より)



第B区遺構遠影(北より)

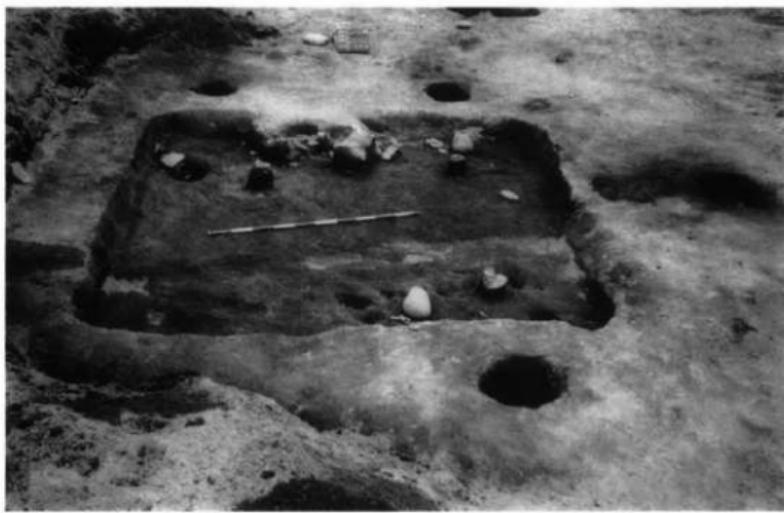


第1号 捜立柱式建物址



第9号 捜立式建物址

図版3 A・B区遺構遠影と捜立柱式建物址



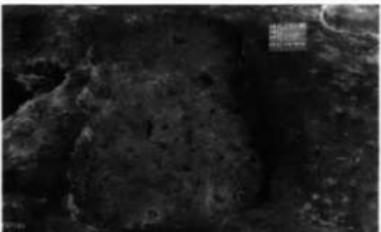
图版4 第1号住居址



図版5 第2号住居址



1号



2号



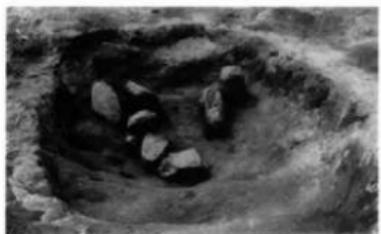
3号



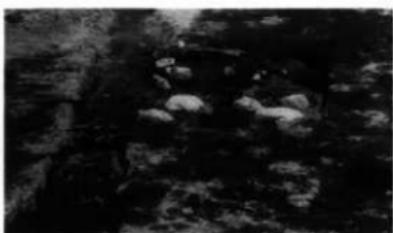
11号



12号



13号



14号



15号

図版6 土壌



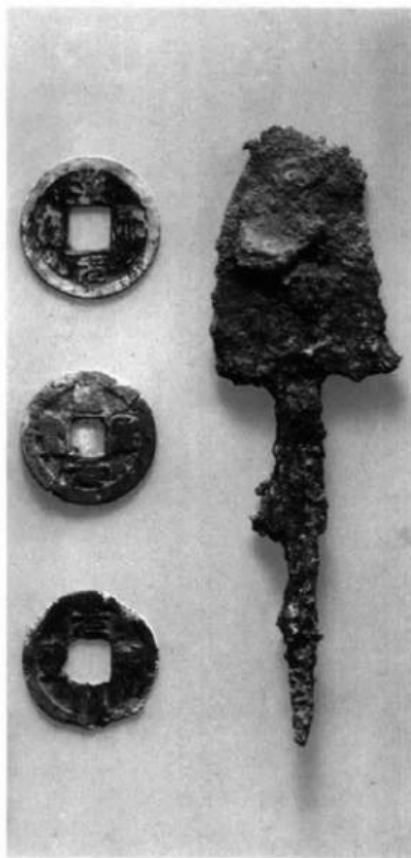
1 : 3 1号住居址



1 : 3 2号住居址

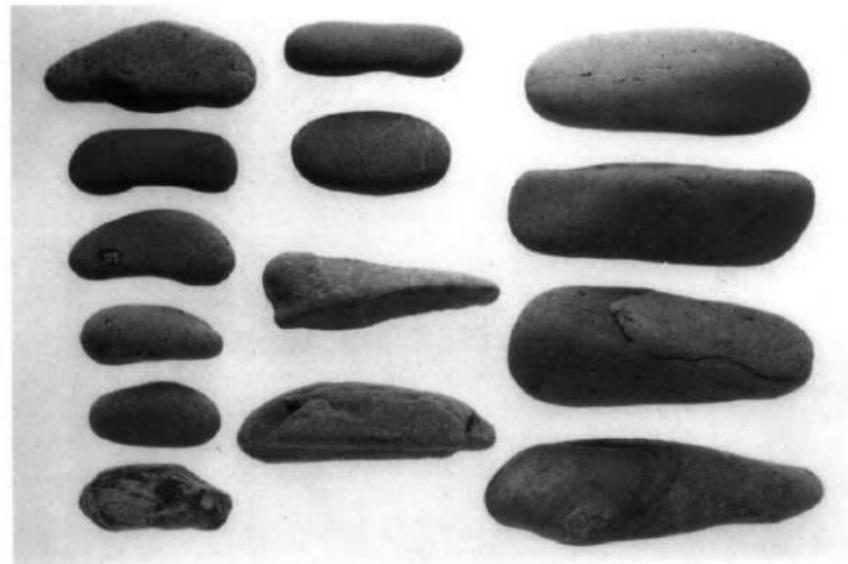


砥石 1 : 1.5



古錢 1 : 1 鐵劍
2号住居址

图版7 出土遗物



図版 8 織物用鍤石 (1:3)

古城南遺跡

—緊急発掘調査報告書—

昭和63年3月19日発行

編集 古城南遺跡発掘調査団

発行 上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会

印刷 伊那市美守下川手

鶴小松総合印刷所

